婦人と子ども

第一卷
第六號

婦人と子ども 第一卷 第六號 目次

卷首

女子高等師範學校 屬幼稚園同主事……中村五六君

子ども

ほたるのほたるの唱歌○ワシントン○おひさんとおつきさま○狐と猫の話○ひげとほーき○鴨を取る法○お月さまと星○節倫家の集會○考へ物○謎々

家庭

子母里ソーダンこによば一較べ……こにしのぶはち
印度土人の家庭生活……Y.
子どもの泣くことに付きて……さひ子
歳縫……岡本ちか子
今昔いろは料理……石井泰二郎
看護法……醫學士長瀬復三郎

學術講義

百合の話……佐藤禮介
俗にいふうどんげの話……東海生
兒童研究法……文學士松本孝二郎

傳史文苑

ヴイクトリア女皇の傳……鄭越生
野村望東尼……下村三四吉
和歌數十首
ばら花、卯の花
首夏、螢……東くめ子
初夏風……夏目さく子
夜路……加藤ひな子
金剛石……小林これ
むだがき……なでしつ
うの花

寄說

健康と家庭……秋影生
老爺の話……愛讀者
中の〳〵小佛……坂井長光女
林女子の地位は如何に進歩し來りたるか……勝又郁次郎
書……

雜錄

六月の自然界○机邊餘錄○音樂的趣味の缺乏○公德の缺乏と私德○改良衣服

彙報

數件、會報

●發行は毎月五日毎に發行第二號一月廿日發行

●定價 一冊金拾錢●郵稅金壹錢●六冊前金金拾七錢 郵稅金六錢●拾貳冊前金壹圓拾錢郵稅金拾貳錢

●臨時增刊は其都度定價を定めて別に申し受く●切手代用は壹割增にて壹錢切手に限る

●注文 は總て前金にて日本橋區本石町三丁目廿三番地金昌堂宛領收證は別に發送せず本誌の到達を以て領收の證と心得らるべし 送金は神田今川橋又は日本橋宰町郵便取扱所受取人金昌堂宛の事見本を要せらるゝときは郵便切手(但し一錢に限る)拾二枚を添へて申越さる可し

●購讀者 宿所姓名は楷書にて御認めの事●轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ●前金相切れ候節は赤にて●印を御姓名の上に附し候間前金御送付を乞ふ●御入用なき時は御斷りを乞ふ

●編輯 學校に關する御照會及原稿御寄贈の節は東京本郷區女子高等師範學校附屬幼稚園内フレートベル會宛のこと

●廣告料 三十二行詰壹行十八錢●特別欄壹行四十錢●壹等二十錢●特別半頁十一圓●壹頁二十圓●壹等半頁五圓八十錢 壹頁十圓●二等半頁五圓●壹頁八圓

明治三十四年六月二日印刷
同 年六月五日發行

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 編輯兼發行者 杉山辰之助
東京市京橋區木挽町九丁目三十二番地 印刷者 中野鉄太郎
東京市京橋區築地三丁目十五番地 帝國印刷株式會社 印刷所
女子高等師範學校附屬幼稚園内 フレートベル會 發行所
東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 金昌堂 發賣所

不許複製

大賣捌所 東京東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

此廣告に依り御注文の御方は婦人と子供を見たる旨御附記を乞ふ

新刊 講習用教科書

簡易 日本小文典 再版

●東宮侍講 本居先生題詠

●全一冊●定價參拾錢●郵稅四錢

●矢澤米三郎、河野鄰藏合著

普通 理科教科書 再版

●理化學及礦物之部全一冊●定價四拾錢●郵稅六錢

●動植物之部全一冊近刊

●女子高等師範學校教諭 東 基吉著

新編 小學教授法

●全一冊●定價四拾五錢●郵稅六錢

國語研究組合編

講習用 國語讀本

●全二冊 近刊

初等教員檢定用 學術講義

學科 修身、文法、算術、日本地理、外國地理、日本歷史、教育、及試驗問題答案等 千二百餘頁 (全六冊出來)

●定價全部壹圓八拾錢●一冊參拾四錢●見本參拾四錢●規則往復はがき●一般ノ讀者ノ便ヲ圖リテ一科毎ニ分冊シタルヲ左ノ普通學講義トス●何時ニテモ求ニ應ズ

普通學講義

●修身拾錢●文法貳拾五錢●算術貳拾五錢●日本地理參拾錢●外國地理參拾錢●日本歷史參拾錢●教育學四拾錢

新撰 受驗寶典

第一編

●日本地理問答既刊●日本歷史問答既刊

●修身(勅語倫論)既刊●博物問答●外國地理問答既刊●理化問答●國語問答●文法問答●算術問答●教育學問答●教授法問答●管理法問答

●本書ハ問答的講義ニシテ附錄ニハ試驗問題ト其ノ答案トヲ數多登載セリ●一冊拾參錢●郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區森川町一番地 帝國通信講習會

發賣所 東京日本橋區本石町三丁目廿三番地 金昌堂

此廣告に依り御注文の御方は婦人と子供を見たる旨御附記を乞ふ

國語研究會編

高等小學 普通文綴方教科書

一二學年用一冊
三四學年用一冊
洋裝製美本

定價各金拾五錢
郵税各金貳錢

本書は改正教則に準據し中正なる難論と確實なる實驗とを以て普通文の本式日用文の用語及び其連絡教授上の配合等現時教育社會に嘖々たる一切の疑問を悉く明解して說述したるものにて能く兒童腦力の發達に適合し且つ實用に適せり是れ實に本書の特色なりされば教授上の參考書若くは生徒の模範文とするに最も適せるのみならず賞與品となすに宜し

發行所 東京市日本橋區本石町三丁目二十三番地 金昌堂

女子高等師範學校講師岡田起作先生編纂書

女子書翰文

上卷正價金貳拾五錢 下卷正價金貳拾八錢 郵税各金四錢宛

文部省檢定濟

女子習字帖

全四冊

一卷金拾錢 二卷金拾壹錢 三卷金拾貳錢 四卷金拾五錢 郵税各金貳錢宛

鳥丸帖

全二冊

上卷金拾八錢 下卷金貳拾錢 郵税各金四錢宛

古今和歌集序

新刊

定價金貳拾五錢 郵税金貳錢

發兌元 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 金昌堂

此廣告に依り御注文の御方は婦人と子供を見たる旨御附記を乞ふ

石井研堂君編有名畫伯挿繪

毎月刊行 理科十二ヶ月

全部拾二冊 毎月一回

正價（一冊金十錢○十二冊前金一圓十錢○郵稅一冊四錢ッヾ）

五月既刊 植物園

全壹冊 正價金拾錢 郵稅金貳錢

植物園といふても珍草奇木のお噺ばかりではありませんぬ園に入りて見聞するものはなんでも捕へまして理科研究の相手に致します池鯉の躍りて水紋の生ずる譯から、筍の身體檢査、鳥類の實愚、青葉と杜鵑などを集めたるもの例之通り中々面白きお噺數十項挿繪は澤山にあります

既刊目次

第一月 新風船
第二月 雪達磨
第三月 花の錦
第四月 汐干狩

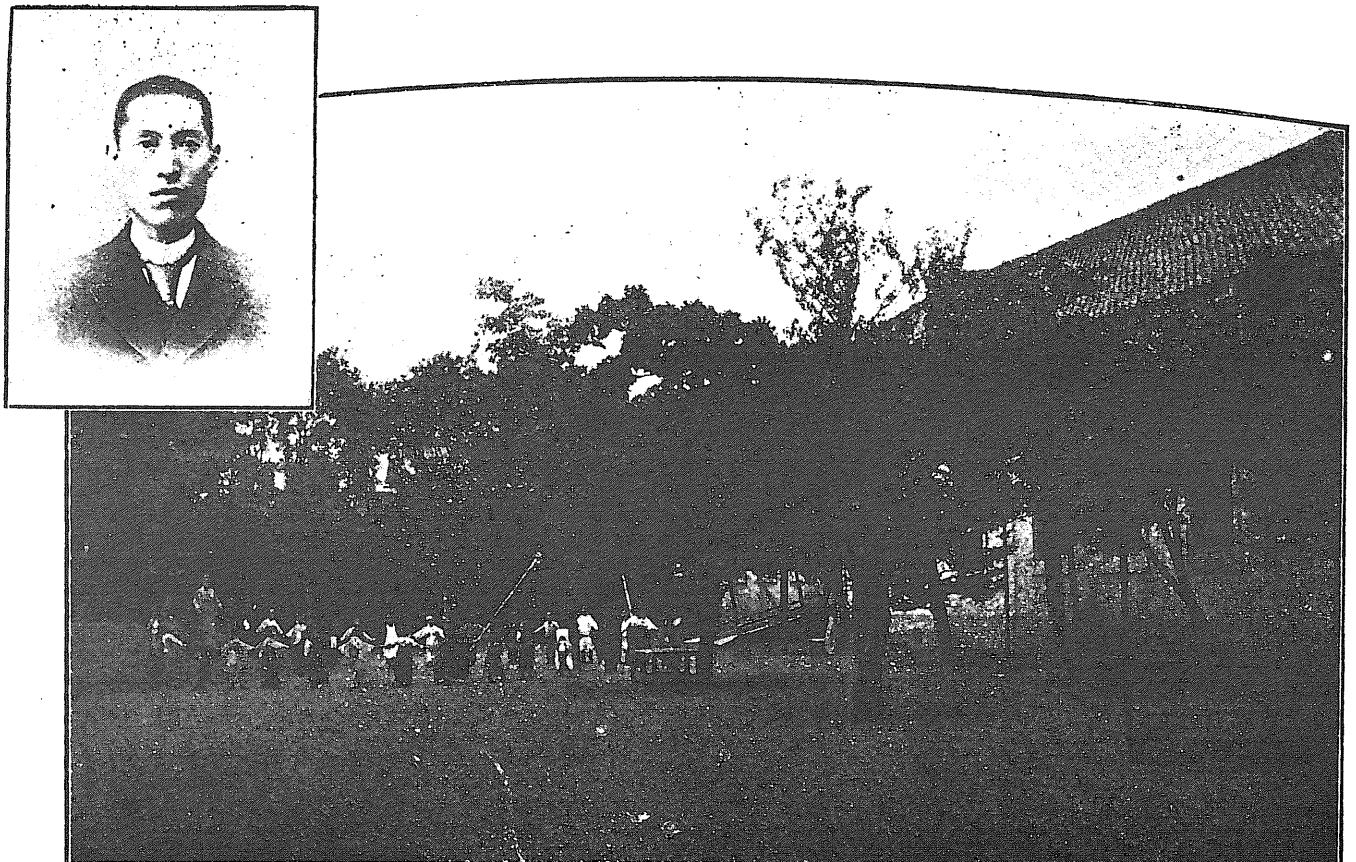
全部目次

一月 新風船
二月 雪達磨
三月 花の錦
四月 汐干狩
五月 植物園
六月 蜻蛉祭
七月 游泳臺
八月 富士詣
九月 暴風雨
十月 銃獵者
十一月 幻燈會
十二月 歸省錄

造花の寶庫を開き、天工の妙理を發し、殊に二十世紀の少年少女の理科思想を鼓吹せんが爲めに、眼前の實例を骨子とし、平易の文章と精巧の繪畫とを筋肉とし、右の十二題の中に、其月其月に關する動植物理科等の初步を記述する者即ちこれなり。實に未曾有の珍書破天荒の新案といふべし。希くは續々購讀を賜へ。

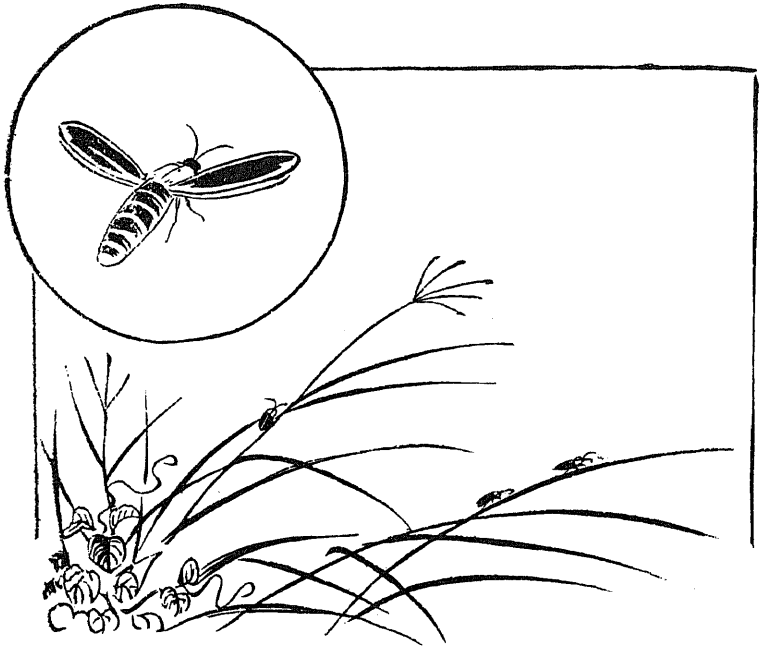
發兌元 東京市日本橋區三丁目 博文館

（前付の四）



君六五村中專主同園稚幼屬附校學範師等高子女

婦人と子ども　第一巻第六號　（明治三十四年六月五日）



（本誌は凡轉載を禁ず）

ほたる

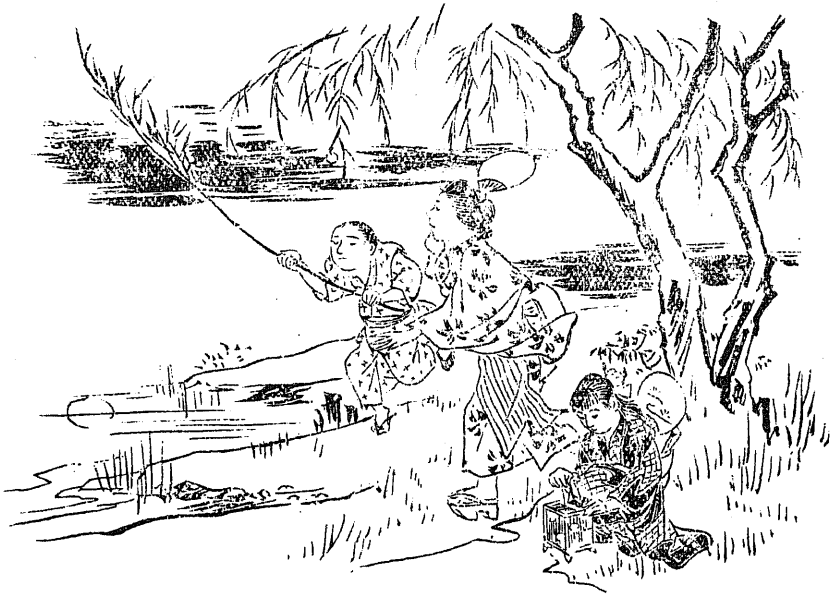
みなさん

ほたる　わ　なに　を

たべて　いきて　いるの

で　しょう。

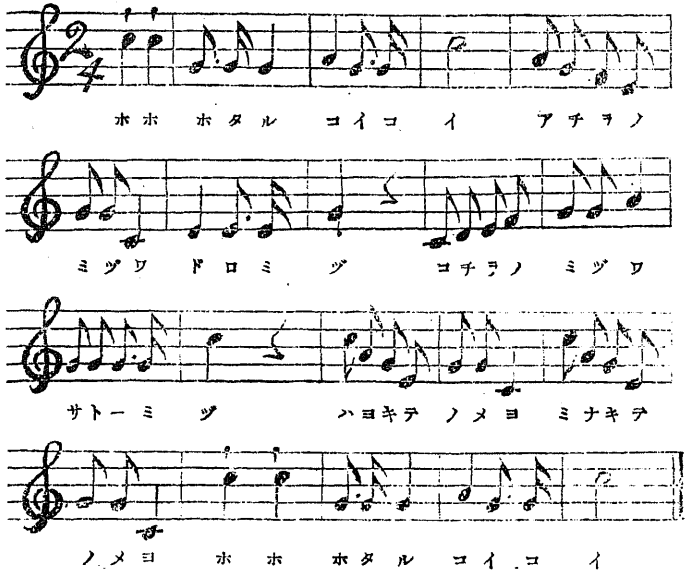
ほたる　わ　どこ　に



すんで　いるので　しょー。
この　え　わ　ぼたる
をとる　とこ　です。
みんな　が　うちわ　と
さゝ　と　で　おっかけて
いましょー。
ぼたるとり　の　うた
わ　ごぞんじ　ですか。
それでわ　いっしょ　に
うたって　みましょー。

ほたる

中村五六作歌
吉田信太作曲

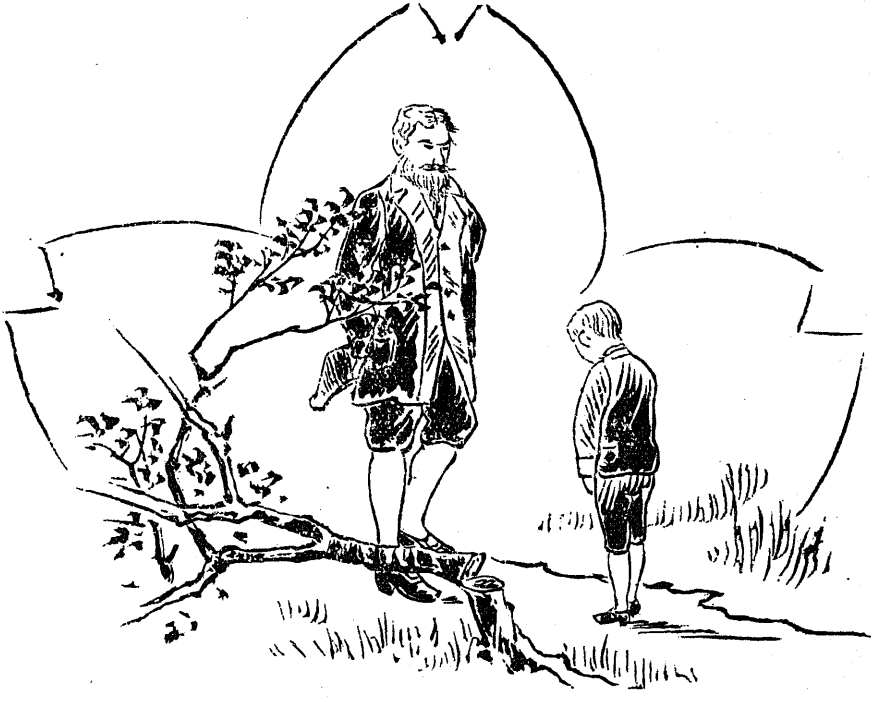


ほたるの歌

ほほ ほたる こい こい
あちら の みづわ どろみ
づ こちら の みづ わ
さとーみづ
はよ きて のめよ みな
きて のめよ
ほほ ほたる こい こ
い

ワシントン

「おとっさん
このさくらわ
わたしがきった
のです。
かんにんして
ちょーだい」



おひさんと
おつきさま

アイヌのどじんが
はこだてのまちで
ちきりにおひさん
とおつきさまとど
ちらがにんげんに
たいせつだろーと
いってそーだんを
しておりました

するとなかにすこしりこーそーなのがあごをつきだして

『それわいわずとおもれたことおつきさまのほーがたいせつおやないかなぜってゆーにおつきさまわちょーちんのかわりになるけれどもおひさんわまひるなかひかるのだもの』といーました

狐と猫

ある日のこと猫が一人で山の中を散歩

していました所がはからず途で狐に出遇いました。

で猫の方でわ狐わ大変に利巧で才子で自分たちよりわズット世の中のことに慣れていると思っていますから平生からしゅー敬まっていますから

す。それで只今も途で

丁寧にお辭儀をしまして

『これわ　狐先生　その後わ　まことに　御無沙汰を　致しました　始終　お變りも　ございませんで今日わ　どちらえ　お出懸けて』

と　かよーに　挨拶を　いたしまずると　狐わグット　高く　かまえこみ　まして　頭から　足の尖まで　猫を　ジロ〳〵　と　見下しながら　暫わ返事を　してやろーか　やるまいか　と　考へて

いましたが　やがて

「やー　誰かと　思ったら　例の鼠取かね　何だっ

てまー　そんな不景氣な風をしてるのだ　一體そんな風をして　我輩に　挨拶をするとゆーのがそも〳〵間違ってるでわ　ないか

どーだ　夫から　少しわ　何か　勉强でもしたか

一體　君わ　何が出來るのか」

ふます　と　猫わ　いて

「何　と　もーしまして　別に出來ることも　ズッいませんが　でも　まー　一藝だけわ　できまて

「フーン　その一藝と　ゆーのわ」

『他でも　ございません　若し　犬に　追かけられ

ました時　樹の上へ　かけ上って　助かることなので」　汰

「なんだ　それだけのことかね　つまらない。　んでながら　我輩などわ　藝といったら　そーされー　百許もあるだろー。　それに　數しれぬ計畧狐わ袋一杯に持っている。　君などわ　可愛相なもんさまー　ともかく　一所に　來たまえ　狩犬から　逃げるあんばいなども　ご覽に　いれよー。」

こんな具合に　狐わ　自慢たらく　猫に　話してる折から　忽　一人の　獵師が　犬を　しかも

四匹まで　ひっぱって
此處を　通りかゝった。
それと　見るや否や
すばやき猫わ　一散に
側の樹木を　目懸けて
かけ上りまして　ズット
高くえ　留って
木の葉で　丸っきり
身體を　かくして　仕

舞いまして、

『どーです　狐先生　例の袋を　お開になってわ』

と　よびかけて見ましたが可愛相に　もー　この時狐わ　四匹の犬に捕まって　さんぐに　嚙まれて苛い目に　遭っています　そこで　猫わ　木の上で

『おやまー　可愛相に　百も　藝があるなんて　自慢して　居られたに　樹木に上ることが　一つ　出來ないんだもの　とーぐ　あんな目に　出遭って　さ』

（おしまい）

ひげ と ほーき

あるひ くらま の やま から きょーと の まち へ ほーき を うり に でてきた おぢーさん が ありました。ひげ を そろーと おもって ある とこや へ はいりました。

とこや の ていしゅも いっぽん かいました。そこで、ひげ を そって しまってから『ほーき は いくらだ』と いひますから くらま の ぢーさん は『にぢっせんだ』と いひました。すると とこや の ていしゅは『すこし たかいから ぢっせん に まけろ それでなければ いらぬから かへす』と いひました

ぢーさん しかた が ないから『そんなら そりちん は いくらだ』と きゝますと『ぢっせんだ』と いふから『それは たかい ぢせんに まけろ それでなければ もと の とーりに ひげ を はやして おけ』と いひました。

鴨をとる法

長野　飯島八千溪

やまとの翁と云ふお方から、鳥をとる法を敎へて頂いて、大層面白うムりました。

私も小さい時に、おぢいさんから鴨をとる法を聞いて置きましたから、皆さんに、お話して見ませうか。併し私も聞いて置いた計りで、未だ一度も試驗した事がないから、矢張慥にとれると、お引受はできませんから どーか其お積りで。

其法は、凧糸の細い強いのを、二三丈計り用意して、其片端へ、鰌を割いて、しっかり付け、夫れを、鴨の澤山下りて居る池へ持って行て、鴨に見付けられぬ樣に、靜に、鰌を池の中へ浮べ、他の片端を手に卷き付て、とられぬ樣に持って居るのです。其中に鴨が見付けて、之れは、旨い香のする餌が有ッたと思ッて、一口に、ぐッと呑んでしまう、處が鰌は強いもの故、お腹の中でつッぱッて、心持がわるいから、直に、糞にひッてしまう。そうすると、その次のが、そんな事とも知らず又呑む、矢張具合がわるいから、之れも亦ひる

其次のも又其次のも同じ樣にして、池中の鴨が、皆一筋の凧糸に、珠數繋に繋がれて、丁度、皆さんが、なんきん玉を糸に通した樣になる。

そこで、棒の尖で、鰌の付いて居る端を搔き寄せ、兩端をしッかり持ッて、放さぬ樣に注意し、片端から手繰ッて、一羽づゝとッて行

くと、しまいには池中の鴨を、一羽も殘さず皆生捕る事ができませう。何と旨い法では有りませぬか。

お月さまと星めやまとの翁

ある月の十五日の火ともし頃一人のお大名がお氣に入りの三太夫をお座近く召されて、

『コリヤ〳〵、三太夫、もー お月さまが出たか』と尋ねられた。すると、三太夫『ハッ』と平伏し、

『これは殿さまの仰せとも思はれませぬ。殿さまが他々のものにお對ひ遊ばされては、さま附はご無用かと存じまする。殿さまからさま附に遊ばされる樣では私ども始め下々の者どもは如何樣に申して宜しいやら頓と困りまするでどーか其邊の御賢慮を願はしうございまする』

お大名 なるほどゝ御感の體で、

『フーン ソーか』

との一言。やがて暫たちますと、

『こりや〳〵 三太夫』

『ハッ』

『エーット そー〳〵 あの星奴らは もー出よつたかな』

節儉家の集會

だん〳〵と世の中が進んで物入がかさんで暮し向きが難儀になると云ふ所から勤儉

貯蓄の奬勵と云ふ目的で　ある七八人の節儉家がある所で　會議を開いた。

この會議は　午後の二時から　始まつたが　議論百出　甲論乙駁　中々　容易に議が纏らない。そーこーしてる中に　だん〳〵日が傾いて　點燈頃となつた。そこで　氣の利いた　一人の會員が早速　マッチを取り出して　ランプを燈さうとした。所で　其中の議長とでもいふべき資格の一人が。

「君、ランプをつけようとするのか　これは怪しからん　相談をするに　何も　眼を使ふ必要がある　ではなし、まして　點燈の必要が　どこに在る？　そんなこつては、大に節儉の趣意に背くでないか」

一座　なる程と感心した。そこで　とう〳〵暗がりで會議を濟ました。

さて　散會となつたが　暗がりで　各自の履物が知れない。是非なく一人が、

「これは　仕方がない　マッチを磨らう」

すると　例の議長が

「なーに　そんな無駄をするには及ばぬ　庭へ下りて　二人づゝ　頭の鉢合せをおやんなさい。直目から火が出るから」

前號考物の解

力轉山上石　石が山の下へ來ると、岩

刀斬水寛竹　寛の竹を斬て仕舞へば、見

不遠千里道　千里を近づけると　重

抱玉一人郎　一人玉を抱ば太で郎、太郎

夫で、答は「岩見重太郎」となります。

これは　元園町帝國婦人協會の照子さんと　奈良縣宇陀郡三本松村の高濱善太郎君とに、甘く當られました。そこで、

この次の考へもの

(一)Smiles を英語の人名の中で　一番　長いのだと云ふ譯は？

(二)十一を　半分に　分けると　六つづゝになるといふその解は？

まー　是丈にして置きましょー。できますか？

謎々

(一)草履取とかけて

(二)馬鹿息子とかけて

なんとゝく。

家庭

子母里そーだん

こにし　のぶはち

鎌倉病床感舊記

にょぼー　くらべ

おちぶれて　袖に涙のかかる時ほど、人の情の感せらるるものはあらじ、戊辰の亂と歴史家の申すなる慶應四年後には明治元年の五月十九日長岡城落ちて城主牧野公はじめ藩士一同會津指して三百年來住みなれし城下を砲烟に委ねて見返り見返り立退き一里ばかり城下はなれたる所に悠久山として藩祖を崇めて蒼柴神社と稱し、吉野櫻の並木數百株を境内としたる靈山春秋二季の大祭には老若男女の四民參詣歡樂する麓をば、旗を卷き聲を忍びて通り過ぎ、誰ありて此靈山を守らんとするもなく、舊主に供奉して前途覺束なく歩行ゆく樣のいとも哀れなるは、修羅の衢を辛やくに過り拔けて又一つの劍の山に攻めあげらるる心地にて三百年の太平の夢を貪ぼりし罰にやあるとかこつもあり老いたるが幼兒の手を取るもあり少年が祖母の手を取るもあり、嫁御りょーが姑の手を取るもあり、新婚の妻が夫の身の上を案じ煩ふもあり、最愛の孫の初陣に打死にもやせんと思ひ煩ふ老爺もあり、行先を定らぬ母子の細雨を冒して泥濘を素足にて脇差帶べるは士の妻の守刀か將又ま

さかの時の覺悟の刀が、思へば凄ごき風情にて昨日までは七萬四千石の大藩ならねど又小藩ならぬ士の妻、今は浪人の妻、我夫は君の爲とこそ戰ひもせめ何の犯せる罪ありてかくは運拙なく主從の跡の問ふべくもあらず、我一人は如何に忍ぶも頑是なき此兒の父を呼び叫ぶを見ては足も進まず、戰爭といふことは大閤記か三國志の昔と思ひしに今はまのあたり、我君我夫の身の上、我も亦落行く人の數とは夢か現か夢ならば早く覺めよ、かゝるは兼て、覺悟あるべきを此場にのぞみて不覺と他し人に見咎められじと、意氣地にも口にはいはねど心には士の身の上はどつらきはなしとはなべての心なるべし。

それをも思ひも酌まず昨日まで我々を士百性と慢どり米のなる木か草かもしらで、白らげ上げたるわたがき飯飽までくらひ、山海の珍味限りつくして奢りし天罰しれやとつぶやきしもありしとか、昨日まで旦那旦那とあがめ世辭たらたらなりしが今は主人顏するもありしとか、かはればかはる世の風情、實に唐人が、掌かへすかへさぬが雲となり雨となるよとうたひしも理りなる。そを悟らぬこそこちの愚痴なれ、愚痴こそ人の弱きところなれやとわれも亦悟らぬ一人なりしぞ口惜しかりき時に年十五同年輩のものにして太鼓を打ち喇叭を吹き軍の人の數に加はりしもありしを、われは其頃上の間手近くいはば、藩の內閣家老奉行の諸老臣の會議所の給仕なりしに、元締という役ありて、申されしには、『御上には既に御城御立退き、御家老御奉行も夫々御供我々も是より御供すべけれど、御前達は此場に及んで御用もなし、軍隊に

用なき人口を減らし、兵粮の差支なきを圖らねばならぬ。上樣御居所定まり、御用あるか、又は戰歿者多く、補充の兵士に呼出さるるか、御用は今日限りでない、行先々々の忠勤抽んづべき大切の身で、呼出しのあるそれまでは、祖父母や母の手傳いたして、身を隱くし、百難忍びて君恩に酬ゆる時を待て、これ即御前達が只今の忠孝の道というものぞ」と、いと懇ろに諭されてピューピューの丸の下くぐりぬけてぞ東山腰たどり行き、六十に近き祖母と母夫れに八歳五歳の妹二人三歳なる弟一人逃げゆくに追付き、弟をば背に母は五歳の妹を背に、八歳なる妹は老祖母の手を引き、日の暮るる頃勝母村といふに着き、伯父が蒲原代官つとめし數年間、老祖母が子の如く愛し使ひしといふが、戰爭はじまる頃より「事あらばわが家にござれ、不自由はさせまじ」と、いと忠實に申すにまかせ、冬もの其他當用ならぬ器具ども預けたるを便りに尋ねゆきしに、何事ぞ「官軍より長岡藩士の落人かくまひおくに於ては嚴罰あるべしとの御觸れあれば、今夜は兎も角も明朝は夜明けぬ前に立のきたまへ、非禮といふに少しのゆかりあれば、それへ御供して賴み上げん」と、情あるごとく情なきが如くなる言の葉に老祖母の落膽今も目に見ゆるぞ、此女房の憎く〳〵しき

勝母とはまさる母ならで、母に勝つとの村名にやと、いまならばつぶやきつらんに、子供心に何のわきまへなく、薄ふみわけ林くぐり、人の通ふ道ならぬ、藪や林や谷間を、結句の興に通り拔け、定めの非禮といふに到り、孫右衞門といふに着けば、亭主は山行きの留主といふに、「おかみさん御亭主

の留主に、かくばかり御親切にあづかり、御亭主が歸られて御前が迷惑してはならぬが』と、母が申すと、『いや〳〵氣遣はシャルナ、亭主はおいらにまさる佛心ふかき、人の難義を見逃がす者ならず、ほめこそすれ何で吠るの迷惑のと申すべき、安心なされ、』と申しゝは、官軍に賣りもやせん下心かと、疑ふまでに物凄く思ひしも、頼み切つたる者に見離さるゝ矢先に、緣もゆかりもない他人の餘りに親切なるに心落ちぬも道理なる。偖亭主といふが山より歸へるや、女房の申すを聞けば、『喃とっつあ(山里のことば)かくかくの次第で御前が留主に御ざつた御客を泊めたぞ悦こばしやれ』といふぞいよ〳〵不思議なる、亭主の申すには、『それはよく氣がついただ、城下の衆は味噌氣の者は喰はしやるまいぞ、醬油があるか』など申すを、老祖母は打ち消し、『コレコレ御亭主そのヨーに心配して下さるな、何でもたべるよ、聞けば此村にも官軍の御觸で、落人かくまう事ならぬときびしき達あるとか、我々のために迷惑かけては濟まぬ、何れへなり立退こうによつて、案内だけは御頼み申す』と聞きて亭主は『ソー急がしやるな、官軍の御達しがあればとて、二百五十年からの大恩ある御領主の御家來衆の難儀を餘所に見られるものかい、御祖師樣の冥加にもかなはぬ、マー今夜はユックリ安心して疲勞を直さつしやい、士と百性の違こそあれ。牧樣(百姓の略語なるべし)の御恩受けしは同じこと鍬とればこそ落付きて御供もせですめ、されば一人でも御士衆を御かくまひ申して、責めてもの御恩返しいたさばやと思ふばかりぞ』と、誠こめての慰めごとは、女房のいふ

にもまさる慈悲ふかき心の奥のみえて、祖母や母の顔に湛へる嬉し涙、子供心にもらひ泣きしも道理なるかな。

捨る鬼あれば助くる佛もありと、夜もやすゝと眠りあかして、さて今日は如何にすべきと案ずれば、亭主は慰めて『いつまで泊まらしやてもいいだが、聞かしやる通り官軍の調らべありては御互のためでないから、向ふの山に見ゆる小屋はわがものなれば、彼れにて安々忍ばしやれ其内には世も治まり殿様も御歸城旦那も御供長いことではあるまい程に力おとすことはいらぬ、いざ案内せん』と、先に立ち行きつきて、暫し其處にいこいて、あの山は會津磐梯山其山は守門嶽是は何山何川と村を指し谷を示し、別れにのぞみ『誰が來て咎めよーとも我が案内したとはいはしやるな、村人ならばいいが廻しものの來ぬともかぎらぬ、飯は運んで來るが火は焚かしやるな』と、注意に注意を與へて山を下り、毎朝飯を運び、夕には來りて後生話に四方山のはなし、篝火の星の數にもくらぶべきを、われは長岡様あれは官軍の陣所ならんなど打ちまぜて徒然をなぐさむるを例とせしこと凡そ一週間一日も缺きたることなきに、十萬億土の佛は頼むに由なきを、此世の生き佛とは此孫右衛門夫婦をこそ申すべけれ。

抑如何なる人なれば數十年面倒見て取立てしものさへ、官軍の調べをいひ草に、一夜の宿も忍ぶ忍ぶに追立てる仕打に、縁ものかりもないものが斯くまで親切にしてくるゝとは、日頃信心の大師の化身にやと、非禮村とは誰が名付けしと祖母と母との悦びばなし盡きぬ中、母の弟なる伯父の君

城下より二里南なる高山村正樂寺の住職なるが、戰爭のため往來止めに身も世もあらぬ思ひして與板の西本願寺掛所にありしが、少しく警戒怠るを見て母の身如何にと探し當て來ましゝ時ぞ、再生の心地してくる〳〵坊主の俄小僧に身をやつし引取られし時の嬉しさ、忘れてならじと與さまくらべの續きくらべ、奥樣と呼ばるるに似もやらぬ夫人もあるに、いろはも知らでかかと呼ばるる山姥にもかかる賴母しきがあるを見れば人の性は敎えにも習にもよらぬものにやと感じき。

夏の蝶あはれや軒にあま宿り

印度土人の家庭生活（承前）

Y. I.

印度人は、一般に親切で快活な方ですから、その家庭の生活にも、やはり此氣質が反射して居ます。

夫から、結婚のことに付て、一言申し上て見ましようか、此國の兒童の結婚法は、まことにわるい風慣なので、之からしていろ〳〵の弊害が起るのでございます。まかし、印度人は割合に親切な感心すべき方法で以てこの惡い制度を實行して居ます。素より年も行かない幼ない女兒が、今まで知ない良人の家族に渡されるのでございますから、時々は悲しい憂い目に遭ふことのあるのは、疑ひもないことではありますが、もと〳〵此女兒たちの自宅に居ります時分には、其母親達が今に姑の許にやれば、直に矯正せられるであろうといふので、大變に氣儘に育てまするのは、寧ろ憐びべきことでございます。

これに付ても思ひ出すのは英國の少年男子のことですが、家庭において居ます頃は、どうも手に餘るほど生意氣で亂暴で困りますと、皆が、今に學校に入れてしまへば、直になをると云つて辛抱して居ますが、眞實にそうなのです。學校にはいつて初めのうちは、面白くないでしやうけれども、丁度印度の少女等とおなじことで、まもなく守らなければならぬ規律にも馴れ、自分達の分限をも知るやうになります。公立學校で少年男子が、上級の年長者にいぢめられるとか、ひどいめにあはされるとか云ふ話を、いくら聞くか知れませんが多分ほんとうなのでしやう。これは疑ひもなく學校組織がその弱點と不完全なる方面とを示して居るのでございます、けれども苦しめられる者の方から見れば、多くの人々はこの嚴酷な訓練を受けた爲めに、大に益せられて、以前よりも餘程善い人となります。之とおなじことで、印度の少女等は家政ひきの一切の仕事やその流儀や毎日の暮のよしなしごとにいたるまでも、怖しい姑のきびしい監督の下で教へこまれて始めて有爲の婦人となるので、いまに又順が來れば、自分で一家を整理し他の少女を訓練することを希望するのが當然なのでございます。恰も上級のものに使役せられて、苦しい生活をなす公立學校の少年男兒が何時かは、上級に登つて愉快にくらす順番の來るのを希望するのと少しも變りはございませぬ。

印度では、凡ての男子も女子も結婚しなければならないことになつて居まして、年わかい妻君は徹頭徹尾姑と長上とに服從しなければなりません。ですけれども、自分では何の撰擇もでけない

ほど幼少のときに、結婚して他家に遣られることですから、割合に辛抱がいたしよいのでございます。それですから、英國風の男女の自由結婚を賞賛する妄説は、いつも打ち消されるのでございます。これと申しますのも、全體印度の社會組織では、自由とか撰擇とかいふことは、男子にでさへも僅かしか許されて居ない位ですから、まして女子のためには秋毫も是認されて居ないのでございます。

印度の男子に自由の權を許すべきことに付いては餘程人々がやかましく云ひ出しましたにも係らず、女子は依然として何時までも束縛されて居ます。

男子方であつて見れば、自分が願へばいくどでも結婚することが出來ますのに、僅か十歳か十二歳の少女が今日結婚したすぐ翌日であろうとも、萬一その良人に死別するやうなことがありますと、もう一生涯寡婦で暮さなければならないのでございます。

前に述べましたやうな風俗であるにも係はらず、印度人の結婚は他國人の考へるよりも、案外に幸福になるのではございますが、併しもういゝ加減な中年の男子が、申さば振分髪の時分から連れ添うて、二十年あるひは三十年といふ永い間苦樂をともにくらした妻を失なうて、其悲しみの釉の尚干るまもない數日の間に、自分の祖母やあるひは年老いたる伯母の心を滿足させるためとか、又は自分の快樂のために、規定の年齡をすぎて居ない一少女兒を妻に娶ろうとして、探すといふものは、むしろ此の上もない悲觀でございます。（續）

夏山に戀しき人や入りにけん
聲ふりたてゝなくほとゝぎす

子どもの泣くことについて

ひさ子

私がこゝに申さう、と思ひます子どもは、一歳や、二歳の赤兒ではなくて、おもに幼稚園時代の、四歳から八歳位までの子どものことでございます。

一體、子どもはよく泣くものでございますが、これには、肉體の苦痛の方から來る啼泣、たとへば、頭が痛いとか、腹が痛いとかに、堪へられませんで泣くのと、また精神の方から泣くのと、大別して二種類になるであらう、と思ひます、そうして私は今、精神の方に付て考へたことを申します。

子どもが、精神の方から泣きますには、誠にいろいろございまして、一々かぞへきることはできませんが、まづすねて怒て泣くのもあり、悲しがつて泣くのもあり、物事にびつくりして泣くのもあり、こはがつて泣くのもあり、氣が小さく依賴心がつよくて、極小さな何でもないことに泣く子もあり、又自分の慾望をかなへんために、泣いておどすのもあり、又自分の惡かつたことをはぢて泣くのもあります。又大きな聲で、永く泣くのもあれば、しく〳〵と泣くのもあり、大聲で泣いてすぐやむのもございます。

此通り、子どもの泣くのには、實にいろ〳〵ございますが、此泣くといふことゝ、子どもの性質

とは、はなれられない關係を持て居ります。たとへば、一寸したことにもすぐ泣く兒は、大抵氣が小さいとか、おこりつぽいとか、あはれつぽいとかの性質を持て居り、永くしく〳〵と泣く兒は大方陰氣な兒であり、惡をはぢて泣く兒は、廉耻心に富む子でございます。ですから幼兒の自然として全く放任しておいてよい啼泣もあり、又やめさせなければならない啼泣もあります。

かの、子どもが泣きさへすれば、機嫌をとつて泣きやませるとか、一も二もなく、やかましいとか、よわいとか、言て叱るとか、泣く毎に父母がまけるとかは、いづれも心ないしかたと思ひます、とにかく子どもの泣くといふことは、其子どもの性質上から、泣く場合、原因、泣き方などをよく〳〵考へて、其處置法、矯正法を定めなければなりません。

私の知て居ります兒に、一人大變よく泣く兒がございまして、この兒は心力のよく發達した、鋭敏な兒でございますが、幼兒不相應に、感情殊に悲哀の情がつよく陰氣で一寸したことでもひどくかなしがりまして、一度泣き出すとなか〳〵やみません。ところが、或日私が此兒の母にあひましたらば、其母は私に向て、自分の夫、即ち此兒の父のはやく亡くなつたこと、今は母子で實家に同居して、いつも身の不幸をかこち居ることなどをくはしくかなしげに語りました。

そこで私はなるほど、思ひました。即ち此兒の不幸、殊に阿母さんのいつも言ふ泣き言が、此兒を此樣によく泣く兒にしたのであるとさとりました。

それ故に、私は阿母さんに、

此樣な鋭敏な兒には、あまりかなしいことをきかせぬがよろしいでせう。幼兒の間は、なるべくそばの人も、元氣よくしてやるがよろしい。

と注意いたしました。

それから、一月二月と經つに從て、此兒はだんだん愉快に活潑になりまして、泣くことも少くなり、今では、かなしげに泣くことは殆ど全くやみ幼兒らしい元氣な兒になりました。

産月の腹をかゝへて田植かな

子供服の裁縫

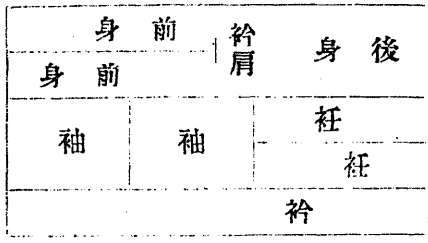
岡本ちか

衞生上、衣服の目的は寒熱を防ぎ、皮膚の健康を保つにあれば、氣候によりて、其地質を撰ぶべく、殊に更衣の季節の如き、温度の激變し易き時には、一層之が撰擇に注意して、病に冒されざる樣、心掛くべきこと肝要なり。斯る時季に、最も適するは毛織にして、即ち其質よく體温を保ち、外熱を遮り輕くして柔かに、且つ暖かなれば小兒などの衣服には、最も適當なり。左に「フランネル」を以て幼兒服の裁方、幷に縫方につき記さんとす。

幅二尺長さ四尺五寸の「フランネル」を以て一つ身服の

裁方

一、裁方の圖



一、裁切の寸法

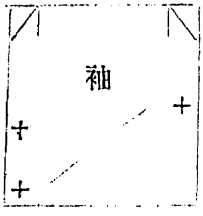
袖丈　六寸
袖幅　八寸
身丈　二尺二寸五分
身幅　九寸五分
袂丈　二尺一寸
袂幅　四寸
衿幅　二寸五分
衿肩　一寸

（注意）此の裁方は一つ身裁なれど其寸法ゆるやかなれば、三つ身服を着る位の子供にも亦用ふることを得、尚袖は運動を自由ならしむため筒袖となす

一、縫上寸法

袖丈　五寸五分
袖幅　六寸五分
袖口　三寸
袖付　四寸五分
脇明　六寸五分
身幅　前後共イッパイ
袂下　二寸五分
衿下　五寸
袂幅　三寸五分
衿幅　一寸

一、縫印付方

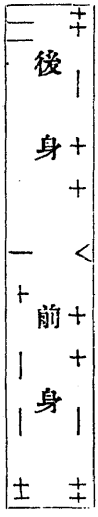


身頃は先づ表を中に後幅を二つに折り後を上に前を下に置き第一圖の如く印をなす

第一圖

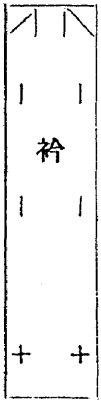
後身を左に開き前身に印を付けたる圖

第二圖



衽は左右二枚重ねて印をなす

衿は丈を二つに折りて印をなす



一、縫方

袖は第一卷の四つ身單衣袖の縫方と同樣なれば略す

身頃は第一脇を縫ひ折目は前布の方に返し、次に衽を取り、衿下を絎け置き、之を身頃に付く（衿下絎方は一方は上より一方は下より衿下の印より一寸五分位上まで絎け置くべし）次に裾を三つ折絎になし、衿を付け衿先を縫ひ三つ衿を入れて之を絎け、次に袖を付け、八ッ口を綴づる等總て四つ身單衣に同じ、

（注意）フランネルは彈力ありて縫日折目などの正しく整ひ難きものなれば縫目は返し針になし、折目は一々まつりつけ、裾、衿下、袖口などは千鳥にかゝり置くを普通の縫方とすれど幼兒服の如く度々縫ひなほしをなす者

は、却て縫目は普通の縫方にして、唯針目を成るべく小さくなし、折目は二つ折紙の如くして綴ぢ付け置くを可とす

山里のくさばの露はしけからん
みのしろ衣ぬはずともきよ

今昔いろは料理

（に）

石井泰次郎

●煮浸の拵へやう

鮎にても鮒にても鱗をふき腹腸を去りて、串にさして焼きて、醤油と味淋と合せたるものにて煮こみ

又は焼たるを鍋に入れて鰹煎汁を魚を淹ふだけ入て充分に煮込むべし、さて味淋を入れ豆油も入れて加減すべし

此時焼くに洗ひたるまゝ何もつけずして焼く、故に白焼といふなり

此時鍋のそこに引ざるとてあみたる物を入れて煮浸すべし、さうすれば、こげつく時の用心となるなり

●二色玉子のこしらへやう

二色玉子は、玉子のよいのを一つ一つ別の器にわりまして、其わります時に、黄身は一つの器に入れ白身は又一つの器に入れまして、又別の大きなもの二つへ黄身をだんだんにまして入れ、白身もだんだんまして別々に入れまして、黄身白身兩方をかきまはしまして、先黄身一合のかさにかつを煎汁一合五勺のわりに入れてよくまぜまして、布で漉して、箱のうすいのに入れて蒸籠に入れまして二十分間ほどむし、それがよいころに上へ白

みの方も布でこして入れまして蒸上ますと二色かさなつたものが出來ますのを切形してだすのです

味は豆油砂糖など少しづゝ入れてつくるものです

●人參汁のこしらへやう

大根を大きく切りまして、鹽を一寸してある鯛を入れみそしるに、かつをの煎汁を加へまして能々煮てつかふのです

●爾多といふ詞

今世ぬたといふものは、あへものゝ名なり、あへものゝにちやにちやせるをぬたといへり、これはにたといふ詞のうつりたるにて正しくは爾多といはねばならぬなり

出雲風土記に

御乾飯爾多爾食座といふ詔見えて其故に其所の名を爾多鄕といふを、今人努多といふよし見えたる、是がぬたの事を正しくは、にたといはねばならぬ證となつてをります

水の上をやみにして飛ぶ螢かな

看護法

醫學士　長瀨復三郎

さて今回は私は小兒の生理といふことの一般に付いて、おはなしをして置いて、そうして次には、小兒の疾病の模樣、これに對して救急療法といふことなどに渡らうと思ひます。

皆さん方が子供を御取扱になります時に第一に注意せねばならぬ事は皆さん方は疾病の子供を取扱ふのではなくして、健全の子供を取扱ふのであるから、其子供が健全であるかどうかと云ふ事

を一目して判るが必要であらうと思ふ。それには小兒の身體の特有性を御承知ならば其特有性から異なつた點を見る事、即ち變化を早く着眼する事が出來れば其子供は如何なる疾病があるかを知る事は易いと思ふ、健康小兒はドウ云ふものであるか、といふに小兒一般の體重と云ふ事を注意せねばならぬ次に胸圍頭の圍り、呼吸の有樣、それから顏面の色、光澤とか、外見上見た所、其位な所が幾らか據ろになる、子供の(體重)は今まで西洋の人が調べた內で、ブシオー氏、ケトレーなどの調べたものがある、さう云ふ者に依て比較して日本の小兒の體重によつて健康が判る、日本の子供の體重は日本の書物には統計は確かでない、先づ初生兒の體重は大抵三千五百グラム位から三千二百グラム位である、三千二百グラムより少ないのもある、男子と女子に依つては違ふは勿論である、一年の男子の子供になると一萬グラム位から乃至九千グラムになる、二年の子供であると一萬千三百四十グラム位、段々初生兒の時から此位な增加を以て行つて十五年の時には三萬九千から四萬五千グラムまでの目方に上つて行く、初生兒に較べて見ると十倍乃至十二倍位な增加を見る尤もこれは男子の表でありまして、女子にして見ればモウ少し輕い、日本の子供では詳しい統計は無いですが併し大凡目方を考へて見るとこれと比較すれば其子供の體重は年齡に適當するか否を知る事が出來やうと思ふ、又各學校の身體檢査の時分の表などもありますけれどもこれも人數も少なく、完全なものと言はれぬ、斯う云ふものは各學校の子供の體重を取りて調べて見て統計を作つたな

ら隨分面白いものが出來るであらうと思ふ。（第一表參照）

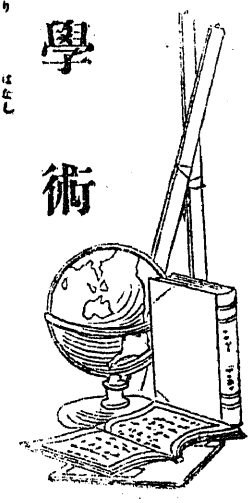
次に（身長）、それはドウ云ふ風に氣を付けて行くかと云ふと、尤も初生兒にして見ても身長は男女によりて一樣でない事は勿論であるが、男子は四九、四、女子は四八、三「センチメートル」位が大凡の長である、日本の初生兒の身長に就ては諸先輩の統計がありますがこれも多少の差異が有るだけであります、一年になると六九、乃至八〇「センチメートル」二年六七九、八「センチメートル」に伸びて行つて、十二三歳の時は一三八、「センチメートル」だけに大くなる、初生兒からして一年までの間は存外多い、年々年を取つて行くに從ふてさうは差はぬ、西洋人でも初生兒の內には日本人と大なる差がない七八歳以上に至つて初めて、差異を、認むるのである（第二表參照）

次に（胸圍）、これも種々あります、初生兒の胸圍は乳の高さで計つたものが平均三十一「センチメートル」さうして七ケ月になつて四十三「センチメートル」、一年以上二年は四七、八僅かな增しよりない、七歳からして九歳位までになると六七、九の胸圍を有つて居る、胸の構造に就ても小供を御覽になると所謂鳩胸と云ふがあり、漏斗胸と云ふがあり、或は胸の偏平なるもあり、又圓いもあり種々形が異つて居る、從つて胸圍も異ひ、健康にも關係がある、それは後で申します、（第三表參照）

年齡	第一表 體重		第二表 身長	第三表 胸圍	第四表 頭圍
初生兒	3200-3500 gr		49,4-48,3 cm	31cm	33-35cm
1 ヶ月	40-00				
2 ヶ月	4700				
3 ヶ月	5350				
4 ヶ月	5950				
5 ヶ月	6500				
6 ヶ月	7000				
7 ヶ月	7450			43	44
8 ヶ月	7850				
9 ヶ月	8200				
10 ヶ月	8500				
11 ヶ月	8750				
1 年	9000		69,8		
2 年	11340		79,6	47	47,5
3 年	12470		86,7		
4 年	14230	男	93,0		
5 年	15770		98,6		
6 年	17240		104,5		
7 年	19100		——	67,9	49,5-53
8 年	20760		116,0		
9 年	22690	姓	122,1		
10 年	24520		128,0		
11 年	27100		133,4		
12 年	29820		138,4		

（頭圍）、これは皆さんも御存じの通り頭の大い子供は時々腦水腫と云ふ病氣で大いのもあり、又頭の構造が小くあつて、痴呆と云ふやうな子供が多くあるものである、頭の圍は一見してこれ位な子供ならばと云ふ區別が付くものであります、普通は初生兒の頭圍は凡そ三十三乃至三十五「センチメートル」、七ヶ月には四四「センチメートル」、それから一年と二年の間は四七、五、七八歳になれば四九、五から五三「センチメートル」位に增して來る、二歳の子供と七歳位になつた子供との差は著しくありませぬが、四五歳の子供を見ても此中間より大いとか、小いとか云ふ事を見ればそれは異狀のあるものと認めて宜いだらうと思ふ、」

（つゞく）



學術

百合の話

佐藤禮介

吾が國の名花の一――吾が國の人は櫻花を以て國粹を代表せる名花なりとして昔より詩に吟じ歌に詠じて居るが、是は國内のみにて國人が觀て賞讃するところのものである。然るに維新以後外國との交通が盛になつてからして、外國人が觀て日本の名花なりと稱するものがある、即ち吾が國の百合と菊である、歐米諸國にも百合や菊はあるけれども、吾が國のゝ樣に壯大美麗なるものはな

い。

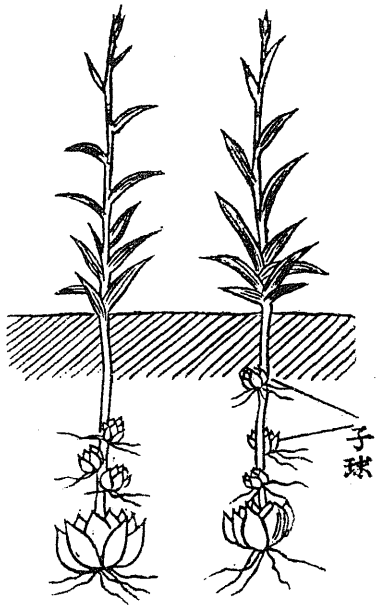
百合花輸出の由來――百合の花の歐羅巴に傳はつたのは、シーザル帝の亞細亞土耳其に於て發見したのに始る。又吾が國の百合の海外に傳はりしは、蘭人シーボルト氏が長崎より歐洲に持ち歸りたるに始まつてをる、併し是は只珍品として傳つたので眞に多量に輸出したのは、更に後のことである。明治六年澳太利國の大博覽會の際に、其の園藝部に數種の百合を出品せしより遽に輸出の途開け遂に今日の樣な盛況となつた現今最も多く百合を產するは埼玉千葉縣地方にして此地方より横濱を經て輸出するのである。

百合の種類と花の形――百合の種類は中々澤山あつて其の變りものを計算すれば、四五十種もあるが其の重なるものを擧ぐれば、卷丹、山百合。平戸。天蓋。竹島。鐵砲。鹿の子。等などである。今此等の中の最普通なる卷丹についてお話をしよう。

卷丹の莖は高さ二三尺になつて花を開きます、花の數は年を經るに從て增すものである、卽ち茲年一つの花が咲いたところの百合を良く培養すれば、翌年には二花其の翌年には三花と順次に或る定限までは數を增加するものである、花は紅色で六つの花瓣の樣なもの（花蓋）が列んで居る、而して其れが皆そり反つて居るから恰も蝶でられた小さな章魚が足を縮めた樣である。其の中には雄蕊が六本ある是は細い糸の先に小さな囊（葯）が付いて居るもので、其の囊の中から赤色の粉が出る。雌蕊は一本丈けで雄蕊に取り圍まれて居るが、中々に長く太いから、一寸見ても直に目に付

きます。雌蕊の先にある球からは何時でも粘る汁を出して居る。蝶が來て他の百合から赤い粉を持て來て此の雌蕊の頭に付ければ決して取れぬ。そうすれば種子が實るのである。

百合の殖え方――百合の殖え方は樣々であつて隨分面白いものである。



（第一圖）

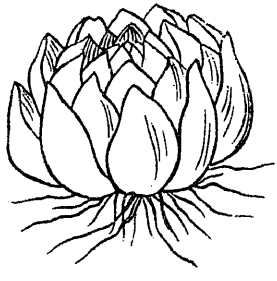
（一）子珠で殖える。（第一圖）秋に百合を掘る時に見れば地の中の根の樣な所に、百合の子珠が幾つか附いて居る、子珠と根と放さぬ樣にして、是に肥た土を掛けて置けば子珠が皆大きな百合の珠となり、三年目位で花が咲きます、掘て食べられる樣になります。

（二）珠芽で殖える（第二圖）卷丹は他の百合と違つて葉の脇に、小さい零餘子の樣な黑い珠が生ず

（第二圖）

る、之を珠芽といふ是を取つて地に埋め置けば、皆一つ〳〵の百合の珠となる是は一番容易い殖え方である。

(三)鱗片で殖える（第三圖）鱗片とは百合の根（學者は是を地中の莖なりといふ）にて吾々の食べる所をいふのです。百合を速に殖さうとするときには、鱗片で殖す方が宜しい。其の仕方を申せば、九月中に百合の根から鱗片を掻き取りて二三時間も日陰にて乾かし、次に其の鱗片を耕したる畑に並べて直立せしめ、上に土を五六分程掛け、其の上に雨を防ぐ爲に雨覆を作る、而して翌春三四月頃に至れば鱗片の掻き取つた傷口の近邊に小さい百合の珠を生ずるものです。其の後に旱天には水を注ぎ雨天には雨覆をして時々肥を與ふれば百合珠が次第に大きくなります。



（第三圖）

(四)種子で殖える――九月頃に種子を取り、殼を取り除いて貯へ置き。翌年三月末頃に土に蒔き種子の隱れる丈け細かい土を掛ける、日光に烈しく當らせぬ爲に日覆をして置き、水を灌げば三週間位で芽を出します、其の後注意して肥料を與へれば三年後には大抵花を開きます、併し此の法は一般の百合を殖すには適せぬので、新に一の變種を作り出すに用ふる仕方である。

百合の効用――百合の花は誠に奇麗なものであつて、白花のものを花瓶に挿せば室内に光明を與へるかの樣に紅色のものは熱誠を現して居るかの樣に紅白の斑あるは天女の裝を凝せるかの樣に感

ずるほどである、一種香百合の如きは芳香室に滿ちて人をして恍惚たらしむるばかりである、花が衆芳を凌ぎ華麗愛すべきのみではない、百合の中には甚だ美味であつて昔から調理の要品として珍重せられたものが多い、山百合、平戸百合等は其の一例である卷丹は少しく苦味あれども食することが出來ます。

又百合の鱗片を擦り碎いて袋にて濾せば澱粉を取ることが出來る、此の澱粉は色極めて白く味佳く甚だ上味なもので、葛蕨馬鈴薯、山慈姑などの澱粉に較ぶれば優ること數等である。

百合は斯樣に花が奇麗で根珠は味良く殖え方面白く植付けること容易いものですから少しく庭園を有せらるゝ人は試に植えられたならば中々興味あることであらうと思ひます。

草むらや百合はなかく　花の顔

俗にいふ、うどんげ、の話

東海生

世間で俗に云ふ、うどんげの花が咲くといふ事は、どんなことであらぶか、うどんげの花がさく年は、豐年であるとか、凶年だとかいつて居る、吾々も時々そんなことを尋ねらるゝことがある、あれは眞實花のさくのであらふか、それとも、蟲などのする仕わざであらふか、といふ疑を普通の人は持つてゐる、でありますから俗にいふ、うどんげの花のことを少々お話致しませう。

うどんげの花といふのは其の實は花ではないのです、全く昆虫の内で、くさかげろうといふ、とんぼの小さなのを見た樣な虫が產みつけた卵であ

る

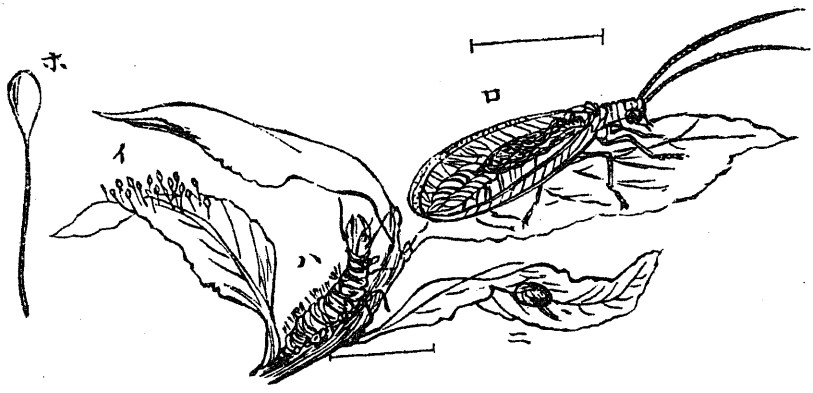
くさかげろうといふ虫はとんぼを小さくした樣であつて翅は大層薄くありまして、其の翅を透して他のものを見る、ことができるので、丁度ガラス板の薄いの、樣に見えます唯ガラス板と異なる所は、其の翅の内を幾筋も糸の樣な脈が通じてゐることであります。

此の糸の樣な脈は其の内を血液が流れてゐて翅を養ふ、ためなので丁度人間の血管が手足などにて見ゆるのと同一であります、くさかげろうの翅にある脈管の色は綠色に見えることがある、綠に少し黃色をさして見えることがある夫れから又肉色に見えることがある、之れは、からだの色が反射したがために起ることで其の實は一色である、からだの色は草の樣な綠色をしてゐる、そして其の上をば縱に白色や黃色の線が走つてゐる、又頭には薄黃色の觸角を二本持てゐる、此の觸角は感覺が大層鋭いので、凡て物に觸れて、其の物は何であるか、自分のために役に立つものであるか、又は害になるものであるかを、早く知る役目をなすのである、此の二本の觸角の間に、黑色の點を持てゐる。

からだは軟かであつて一面に黑い、短い、毛がはえてゐて、紫褐色の斑點を持つてゐる。

こんな形をしてゐる、くさかげろう、がどをして、卵を產むのであるか、卽ち、どをして、うどんげ、の花を此の虫が、こしらえるのかといふに、始め、からだ、の後部を木の葉や、幹に、つけて、尻から、軟らかな、飴の樣な、粘液を出しながら、尻を上げらるゝだけ高く、あげて、其の粘液で白

色の針の樣な棒を木の葉の上に立て其頂上に卵をつけるので、丁度きのこのまだ開かないのを見た樣な形をしてゐる、斯の如きことを、幾度も繰り返へすと、うどん



げの花が、できるのである、卵をかく産みつけて、後、間もなく卵は破れて（ハ）の如き幼虫が、はいでる此のときは卵が破るゝのですから俗にうどんげの花が開いた、と、いふのである、此のくさかげろうの幼蟲は、益にもなれば、又、害にもなる、之れが蚜蟲といふ害蟲を食するから、農家は蚜蟲の損害を免ぬかるゝことを得る、其の代りに此の幼蟲は草木を食することも隨分甚だしい、依て此の幼蟲が澤山むらがる時には農家に害を及ぼすことは大したものである。

氣候が暖であつて萬事好都合な年には、幼蟲を生ずることが特別に多く、秋に至れば冬越をする成蟲が澤山できてくる。

幼蟲が充分發達すれば、其の住んでゐる所で、かなり堅い、まゆ、を作りて蛹となる此の、蛹が、

まゆ、を、かみ破りて成蟲となるのである、上にある圖の（イ）は、うどんげ、の花を示したので、其の左側の（ホ）は、うどんげの花の一つを大きくして見たのだ、又。うどんげの花の横にある（ハ）は此の花の頂きの卵が破れて出た所の、くさかげろう、の子供を大きくした所であります、又其横の（ニ）といふのは夫れが作つた、まゆ、でありまして此のまゆの内から（ロ）を見た樣な、くさかげろうが出て、くるので、之れが成蟲であつて、うどんげの花をこしらえるのであります。

Steter Tropfen höhlt den Stein.

點滴石を穿つ

記者申す。本號記事非常に輻湊せしにつき、英語俚諺解は掲載するを得ず。讀者、乞ふ諒せよ。

講義

兒童研究法（承前）

松本孝二郎講演

そこで極く幼い時分から。段々に發達して行きます順序を追ふて、發達の順序を研究すると云ふ方法を執つて考へますならば、孰れの家庭に於ても兒童の發達史を作つて置くが宜い、これも母親が自分の家で私に書留めて置くものと、其家の歴史、其子供に取りての親より讓りものとなるべきやうなものと、此二つを書いて置く方が宜いやう

である。家の寶ともなるやうな發育史は多少、趣向を加へて多少美術的に出來て居ても宜いやうである。一の子供が生れてから小學校に行きます頃までのものを書き記す小い書物があれば餘程面白い。それで、此次の會の時には一のお手本を御目にかける積りでありますが私の知つて居る帳簿に就て申すと、子供が生るゝと云ふ第一日の所に於きまして何時何十分に生れたと云ふ事を記しますやうな所には段々これから日の出になつて來る朝の景色の奇麗な畫を書いてある。其下に何時に生れたと書いてあるは美術的で趣向が面白い。詰り朝の日の出のやうな勢ひを以て子供が生れて來、將來段々發育して來る所を祝つてある心持である。

其次位に於ては、其子供に名前を付ける所、即ち誰にどう云ふ名前を付けて貰ふたと云ふ一頁が必要である、これも其子供の一生の内大事な事柄である。其他初めて身體の目方などを量ります所、此等も其の所の傍らに實に愛らしき生れたての子供が一のハンケチのやうなものに包まれて權衡の傍らにをかれた繪がある。即ち子供のまだ學校へも行かぬやうな者に自分の目方の事を書いてある所であると云ふ事が一見して判るやうな繪を書いてある。其他子供に取りて初めての御祝ひとしてはどう云ふものを貰ふたか、翫具の上では初めてどういふ翫具を貰ふたか、或は又初めて幼稚園に行きましたは何時からである兄弟などが。連合して幼稚園に行く所の奇麗な繪を入れて置くと云ふやうな事は最も面白い。或は這い初めたは何時頃からであるか。現に私の見て居る記錄にすべきも

の丶中にも極く可愛い子供が床の上に寢て居り、さうして手を擴げ、足を投げて自分の前に居る猫の所に非常の宜い勢ひを以て行かふとして居る繪がある。さう云ふ子供の内でも一生の出來事と見るべきものを文字の讀めぬ子供にも一目して判る繪を添へて一の記錄が出來て居るやうな風に計畫するは餘程面白い。

もー一方は母親の手控へとでも云ふべきものであつて普通の記錄を致します所の帳面のやうなものである。これも一頁を一日の記中に費すやうに考へて置いて宜いと思ふ。一年間三百六十五頁あれば出來ます。これも家によつては當用日記など用ひて居る家ならば其中の一部を子供の發育の事に充てゝ置いても宜いでありませう。初めの内は記事が少ないものであるから、一頁の内でも書く事は僅かであるけれども、これは矢張一頁を一日分として用ふるが餘程宜しいやうであります、さうして其記錄を附けますに當りましても大凡母親たる人々の注意すべき項目と云ふものがあります。今其項目の極く大體を此處に擧げて見ますと重もに子供の初めの内は身體の方に關係した所の項目が一番必要であります。精神上の事は至つて變化が僅かでありまして、却つて初めの内は肉體上の事に注意すべき事が多い。これも初めからして大凡ドレ位の項目に注意すべきかを知れば漏らす事がないが、左もなければ大事な事でも漏す事の憂ひがある。それを漏さぬには條目になつて擧つて居る方が都合が宜いやうに考へらるゝ。其條目は

第一は衣服の事。これは衣服と申ますが其内で

着物の質はドウ云ふ質のものを着せるとか、ドレ位に餘計着せるとか、少なく着せるとか、其他履物とか靴とか、帽子であるとか云ふものも衣服と云ふ内に含めまして、さう云ふ事の記錄を漏さぬやうにせねばならぬ。

第二には身體に就ての注意。此内に於ては勿論目とか耳とか鼻とか齒、爪、皮膚、毛、腹、足それ等の點に就て、何か異常がないかどうか、或は發育上特に注意すべき事柄が無いかとか、注意すべき事を書記さねばならぬ。又、子供に湯を使はすには幾らの溫度にしたとか云ふ事も此内に入れねばならぬ。

第三には子供に與ふる食物の事。此食物に就ても食べさす品物の性質、例へばドレ位煮たとか、ドレ位炙いたとか、ドレ位な溫度にしたとか、ドレ位の分量にするとか、一日に何ぼ與へるとか、少しく大くなれば其子供の好き嫌ひと云ふやうな事、又嫌ひな物に向つてはドウ云ふ取扱すべきであるとか、現在ドウ云ふ取扱をしたとか、學校に持たして遣る辨當はドウ云ふ風に注意するとか云ふ事は何時でも自分に實際子供に向つてやつて居る所、自分もそれに就て子供がドウ云ふやうにわつたとか云ふ經驗、それ等を漏す所なく書記さねばならぬ。此等は何れも母親が寄集る時の一の問題になり、家庭に向つて注意を與ふる研究の問題となるものであります。

第四ケ條は睡眠と云ふ事。眠りの事に就てもそれは主もに其子供と一所に居る所の人でなければ判りませぬ事でありますがドレ位の時間を眠つて居るとか、睡眠中は極く穩かに寢て居るやうな狀

態であるとか、齒ぎしりするとか、寢言を云ふとか、たび〳〵夜起きるやうな事がありはせぬか、若しさう云ふ事があれば、其原因はドウ云ふ所に在るであらうか、重もにさう云ふやうな有樣は神經系統の大抵衰弱から起つて來て居ります、餘り精神や身體を度を過ごして疲らしめた所からさう云ふ事が起るものであるから、其内の何の原因から安眠が出來ぬやうな有樣になつたであらうと云ふ事を自分に推測してさうして書いて置く。又睡眠と食物の關係は如何、ドウ云ふ食物を與へた時は能く睡眠したとか、ドウ云ふ食物を與へた時はドウであつたと云ふ事に氣を着けねばならぬ。子供の働いた事と遊んだ事の度合に就て眠りの方に影響を與ふるものである。其等の注意も書かねばならぬ。

第五は運動と云ふ事。これも男女の子供に依りましてそれ〳〵ドウ云ふやうに違ふか。種々天然的の違ひと又其家々の仕附け方に依つて運動の仕方が違ふ。これもドウ云ふやうに運動さすか、ドウ云ふ場所で運動さすか、ドウ云ふ時を撰びて運動さすかと云ふやうな事を書いて置く。

第六は惡習慣と云ふものを書いて置くこと。訥るとか指を嚙むとか、身體を振り動かすとか、顏をしかめる事、それから呼吸をするに鼻で重もに呼吸をするは宜い習慣であるが口から呼吸をするは一の惡習慣である。かゝる類のものが澤山ある。若し其惡習慣が子供に付けばさう云ふ惡習慣の起つた原因に注意し母親の注意から治す事が出來たならば其方法も書いて置くが必要である。

第七は發育の時期。男女に依て發育して行く時

期が違ひます。發育して行く度合が違ひます。年齡に依つても發育が違ひ、身體も何の部分から早く發育すると云ふ事もありますから發育の時期と云ふ事も注意せねばならぬ。

第八には家庭及び學校の衞生上の設備、これは例へば空氣がドウであるとか、光線がドウであるとか云ふ類の事でありまして、隨分斯う云ふ風の不完全な所から子供の病を惹起すやうな事がある、學校及び自分の家はどう云ふ所が不完全であると云ふ事を注意して置けば子供の病氣に關して參考になる事もあり、豫じめ病氣を防ぐ事も出來るでありませう。

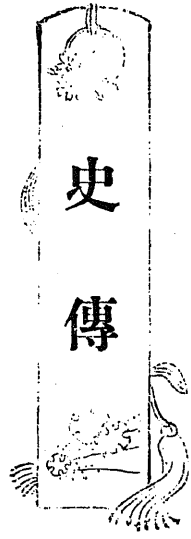
さう云ふ、事柄に注意を致しまして其等の事件は必ず子供の發達史の内に書いて置くやうにする。母親たる者は自分が現に認めた事をば記して

他の人の言つた事を直ぐに信用を置くは宜しくない事で、自ら確めなければ書かぬようにする。只今御話をしたやうにして置けば其子供は普通の子供より强壯であるとか、虛弱であるとか云ふ事の判斷も出來、子供が幾人もあれば前の子供と今度の子供と幾ら違ふと云ふ事の參考にもなるものである。又其やうに爲す所から種々の同情とか、興味とか、熱心とか云ふものも起つて來る。

發達史は此頃は見へるやうである、教育の方の雜誌であるとか、或は兒童研究などに、種々の事の方針を御書きになつたものがたび〳〵出て居りますから其れ等も隨分實際の例となる。又昔から傳はつて居りますのはテーデマンと云ふ人の兒童觀察、これも飜譯になつて居り、亞米利加ではシンとかムーアと云ふ教育のある婦人のやつたも

のもあります。英語の御判りの方はさう云ふ女の人が、現にやつて居る發達史を參考する事も出來此外にプライエルと云ふ人の子供の心と云ふものも出來て居り、英譯にもなつて居り、日本譯にもなつて居る。それでも大凡やり方が判る又もう少し細かに進みましてこれから其日誌の中に書き込む事をどうして調べて行くかと云ふ事を考へねばならぬ。（つゞく）

ふかき淵うすき氷の誠を
こゝろにかけぬ人ぞ危ふき



ヴイクトリア女皇の傳（つゞき）

鄭越生　補譯

母君ケント公爵夫人には、女皇の御健康につきて、ひたすら御心配あそばし、しば〳〵諸方に御轉地なさいました、此の頃折々御出でになりましたのは、ラムスゲートとマルヴエルンとでございます、勿論此の二個所は氣候が誠に溫和でありますので、よく女皇の御健康に相應したのでございませう。

そのマルヴエルンに御滯在の折の事でございま

したが、女皇には或る日御近郊を御散歩なさいました、折しも夏の初めでありまして、黄金色の花、綠の若葉、乃至舞ひ狂ふ蜂蝶何れも女皇の御心を慰め奉る景色のみでありましたので、女皇には、御機嫌斜めならず、御愛犬を伴はせられて、彼方に馳せ此方に分け入り、獨り輿に入りて居らせられましたが、此の時不意に草叢の中より顯れ出でたる一少女がありました、女皇には忙はしく少女のもとに馳せよりたまひ、

少女よ、お前氣の毒だが、此の犬を抱いて來てくれぬか

と仰せられました、誠に御遠慮なく無邪氣で入らせらるゝことでございます、少女は見も知らぬものに、だしぬけに斯ることをいふ、如何にも妙な事であるとは思ひましたが、むげに斷るも氣の毒と思ひましたのか

かしこまりました、抱いて參りませう

と申し上げまして、犬を抱き上げ、女皇とともに御話しをしながら、いそ〳〵とでかけました、さばらくしますと少女には、左も疲れたらん風情にて

私は疲れてしまいました、御免を蒙むります

と申し上げますと、女皇には

疲れた？　まだお前はごく僅か外抱いて來ぬではないか

少女は

いへ十分でございます、殊に唯今伯母の處に要事がございまして參るのでございますから、御免を蒙りたうございます、

女皇はうなづきたまひしがやがて

お前の伯母さんの家は何處？

と仰せられますと、少女は

つひ、その先きの山の下に見えて居ります、あの赤い色の家でございます

と申えますので、女皇は

そんなら、私もお前の伯母さんの家に遊びに行かうさー駈げて行かう

と仰せられまして、少女と手に手を取りあひ駈け出して御出でになりました、この時母君と保姆とは、女皇の後を認めて御出でになりましたが、保姆は是を見て

殿下、もー御止めあそばせ

と蒼だしく申しますと、二人は歩を止め、ふり返りましたが、少女は、殿下といふ聲をきゝて初めて、こはかねて承り及びしヴイクトリア殿下にてあらせられしか、知らぬ事とは云ひながら、無禮を申し上げたる罪免れんやうなし、如何にせんかと心を痛ましたので、女皇には少女の風を見てとりたまひ、種々になぐさめられ、且つ母君は少女の親切をいたはり少なからぬ金貨を御與へになりましたので、少女は有りがたくて御暇を申し上げましたが、この少女は此後右の金貨を紀念として奉掲し終身洪恩を忘れなんだと云ふ事であります。

一千八百二十七年、女皇の御齡九歳の時の事を記した書物がございます、今其中の一節を御話し致しませう、此の書物はナイトと云ふ人の著でございますが誠によく寫してあります。

天漸く白けケンシントン城外の朝露未だ晞かず、此の時私は心地よく曉風に面を吹かせつゝ城外の大路を散歩致して居りますと、彼方に人

の一團が居りますのを認めました、はてな朝早くから何だらうと怪しみながらだん〳〵近づきますと、こは如何に、ケント公爵夫人には女皇とともに新鮮なる空氣を吸ひ玉ひつゝ、黄き草原の上で、朝飯をめし上がつて居らせらるゝのでございました、私は恐れ入りまして、直ちに駈け返りませうとも思ひましたが、ケント公爵夫人の御思召を恐察したてまつり、また女皇の美しき玉の如き御容顔と、時々溢れん許りの愛情を以て女皇と御話しし給ふケント公爵夫人の御樣子を拜し奉りては、なか〳〵に逃げ歸りもならず、思はず地に伏して拜しましたが、感にたへずして涙を催ふし身はぞく〳〵と戰へるやうに覺へました、是か即ち美感に打たれたのでございませう、ケント公爵夫人が教育に御熱心なる、誠に斯くの如し、私は公爵夫人及び其の愛女の幸福を祈り、さて後に神に謝しました、今の世にあたり、かゝる有り難き神聖なる教育及び其の教育の結果を、まのあたり見ることを得たる恩惠に向つて神に謝しました。

云々とありますが、誠に公爵夫人の御熱心なることは能く表れて居ります。（つゞく）

晴間なく空に雲そふ五月雨に
のきばの梅に實さへこぼるゝ

野村望東尼

下村三四吉

明治の維新は、空前の盛事なり、蓋し多年養成せられたる尊王の氣風は、德川幕府の盛時より已

に一道の暗潮を成せりしが、外交問題の切迫するに及びて、一時に激發し、その勢滔々として、遂に德川幕府の基礎を漂蕩し去り、明治の大御世を開きぬ、この際、身を以て國家に殉したる義烈の人士は、擧げて數ふべからず、婦人にして、これにあづかれるも、またありて、近衞家の老女津崎村岡と福岡の野村望東尼とは、ことに著れたり。後なる人の事歷は、余が今ここに述べんとおもふところなり。

望東尼のはじめの名は、もと子といへり。筑前國福岡の藩士浦野十兵衞勝幸が次女にて、文化三年九月を以て生れたり。容貌は、溫和なれども、その性明敏にして、剛健快活の氣象をそなへき。婦人の諸藝能に通じたりしは、いふまでもなく、和歌及び筆道も、大隈言道を師として、その妙に至れり。年廿四の時、同藩の士野村新三郎貞貫に嫁して、その後室となりしが、琴瑟能く調ひ情交甚だ密なりき。

新三郎は、學ありて、風雅の道を好みければ、壯年過ぐる頃、家を子息卯右衞門に讓りて隱居の身となりぬ。福岡城下の南に平尾山といへるがありて、しげれる木立、淸きながれ、幽邃閑雅の景致に富みたり。新三郎、よりて別莊をこゝに營み夫妻相携さへて林泉の間に唱和優遊し、いとも樂しき生活を送りぬ。

歲月いくたびか改まりて、もと子が年五十四に及びけるとき、夫新三郎は病にかゝりて歿りぬ。悲歎の情やるかたなく、孤棲の夢破れがちなりき。もと子遂に髮をおろして尼となり、名を望東と改めぬ。こは、もとゝ望東とは、國音相近き上に、

東を望みて禁闕をしたひ奉る意をもよそへて、つけたるなりといふ。望東が勤王の志こゝにはの見えたり。更にこれを發揚せしめしものは、實に當時の時勢なり。從來極めて平和なりし生活は、やうやく變化を呈せんとす。

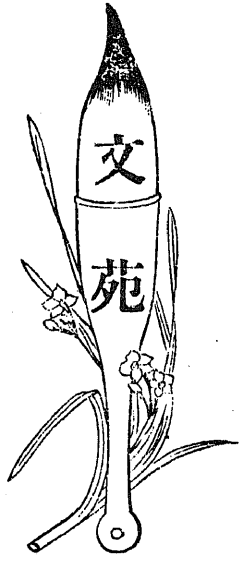
米艦が始めて浦賀に來りて通商を求めける嘉永六年は、正に望東が四十八歳の時に當れり。これより、尊王攘夷の論海内に喧しく、人心恟々として、國家の安危たゞこの一時にとぞ思はれける。幕府が勅許を經ずして五國通商條約に調印したるを始めとして、十三代將軍家定の養君問題に關する紛議、水戸家に攘夷依頼の内勅を賜はりたるより起れる安政戊午(五年)の大獄より、さては、萬延元年の大老井伊直弼の遭害に至るまで、幾多の驚心駭目の事、相ついで起り、内外實に多難を極めぬ。志あるものいかで、奮ひ起ちて國事に盡力せざるべき。夫に死別れて後、また人間の事に意なきものゝ如くなりし望東尼も(夫を喪ひしは、即ち安政六年なり)、時勢の影響を被ふり、亡夫に對する悲嘆の情より驅られて、更に勤王の熱血はその血管に沸きぬ。されど、さすがに、貞靜の女性なり、徒に狂奔して爲すところなき愚をば學ばず。請ふ、徐にその經過を語らしめよ。

この時に當り、朝廷は幕府の專斷を憤らせられ下には、尊王攘夷の說益々盛んにして、朝廷と幕府との間漸く乖離を見んとす。こゝに於いて、いはゆる公武合體說は起り、文久元年冬、皇妹和宮、十四代將軍家茂に降嫁せられき。望東、その行裝を拜せんために、京都に赴くしが海上風波にあひ、期に後れしかば、因りて京都に滯留し、或は名勝

故蹟を尋ね、或は謁を名公に求め、交を志士に結びぬ。

先に、安政戊午の大獄の時、上に記せる津崎村岡は、水戸賜勅の事に周旋するところありしかぞを以て、幕吏に捕へられ、一旦江戸に押送せられ評定所の糺問を受けしが、やうやく放免せられき。これより、村岡は、京都嵯峨なる直指庵に幽居し、近衛家の先代幷に亡友月照の冥福を祈りて静に餘生を送れり。望東尼、一日嵐山に遊び、歸途、村岡の幽居を訪ひけるが、村岡嫌疑を避け、面晤を辭せり。望東、殘り惜しさ限りなく、雲井にも、君が名たかく、聞えけり、したひくる身を、あはれとも見よ」とよみ出でしかば、村岡も「はるばると、たづねし君の、めぐみをも、しづ心なく、あはでくるしさ」と答へき。勤王の志篤き兩女傑の心事眞に想像するに堪へたり。（つゞく）

川骨の一輪強き姿かな



汐干狩　中島歌子

いつこなて汐はひつらん袖か浦
小さくみゆる沖の人かけ

首夏蝶　同人

飛てゝの羽袖もしろしうの花の
はるを隔てしかきねわたりは

曉落花　天野瀧子

鳥もまた寢くらはなれぬ曉の
かせなき庭にちるさくらかな

春夢　日野西廣子

手枕の春風寒し夢にみし
はなのふゝきや身にしみにけむ

山中藤　中村禮子

若葉のみしけると見えし山陰の
いはねにうつる藤なみのはな

月下瀧車　磯部艶子

とくはしる車は過て月かけの
くまとなれるはけふり成けり

旅泊風　木原庫子

大舟のいかりおろして寢たるよも
こゝろのさはくかせの音かな

隣柳　竹屋つね子

我ものとおもふはかりにとなりより
なひきかゝれる青柳のいと

水邊藤　大石津留子

ひらさきの雲かと見えてみなそこに
うつる藤波かけゆらきけり

同　工藤しけ子

いさらゐにしみつくまむとおりたては
たもとにかゝる藤波の花

山吹　篠原みやの

舟とめて折らんとすれは瀨をはやみ
こゝろをのこす岸の山吹

庭新樹　池袋すか子

あさきよめ袂涼しくなりにけり
庭の若葉のつゆもこぼれて

山吹　國越八重子

八重一重枝もたはゝにさきにけり
露もおきそふ山吹の花

皇子御降誕を祝ひ奉りて　槻尾薫子

久方のくもゐはるかに一聲を
なのりそめたる千代の雛鶴

地久節を祝ひ奉りて　同

夏ひきの手ひきの糸をくりかへし
君か八千代を祝ひける哉

海邊郭公　田島まず子

青海原浪路はるかに月さえて
松原とほくなくほとゝきす

落花　同

玉たれのをすふきちらす山風に
ふみよむもとに花そ亂るゝ

首夏　山川郁子

葉かくれにいつか來なかん郭公
初音ゆかしき夏は來にけり

首夏風　同

おそさくら匂ふあたりを吹きそめて
風こゝちよき夏は來にけり

水邊藤　館つね子

にごりなき水にうつれる藤波の
若紫の色そゆかしき

皇子御降誕を祝ひ奉りて　鎌田きく子

千とせへんおひさきしるきひなつるの
すたちし今日そうれしかりける

鶯　森岡たけ子

きみかへむ千とせの春を鶯も
いはひて歌ふ今日ぞ樂しき

水邊藤　森岡たけ子

ふち波のかけきよらにも見ゆるかな

庭のいけ水そこもすみつゝ

皇子御降誕を祝ひ祭りて　同

すこもりし千代のひなつる一聲の

雲井にひゞく今日ぞうれしき

暮春　松宮ゆた子

まちわびし花のさかりもとくすぎて

こすゑさびしき春の暮かな

首夏　同

藤花の池の汀にうつろひて

若葉すゞしき夏は來にけり

首夏山　岡田折枝

なつころもかふべき頃となりぬらし

山のかすみのはれわたりぬる

山吹　小島たつ

あすか川櫻ながれてゆく春を

しばしはせきて匂ふ山吹

水邊藤　同　人

池水にうつる藤浪立ちかへり

見れどもあかぬ花の色かな

落花　鈴木ゆき子

朝日かけいまだにほはぬ山もとの

庵の面しろくちる櫻かな

增鏡　小々高みさを

つき〳〵に世々をうつせるますかゞみ

かけてあふがむ古の跡

千代をへてくもらぬかけをとゞめおく

史こそ世々のかゞみなりけれ

山中子規　手塚ゑづ

ゑばしとて谷の木蔭にやすらへば
　ひかひの山になくほとゝぎす

山　吹　寺島とく

行く水に清きすがたをうつしつゝ
　にほふもゆかし山吹の花

首夏藤　夏草

別れにし春のかたみと藤波も
　いつしか木々にかくろひにけり

首夏風

つくろはぬ庭もすゞしき夏木立
　小すまき上げて風を待つかな

親

我子をばよかれと願ふ親ごゝろ
　いつこの國も變らざるらん

折にふれて

心をば露けかさしよ世に出でゝ
　身はやれころもよしまとふとも

ばらの花（唱歌）　東条子

ひらさめ晴れし　かとの垣根に
名殘のつゆの　匂こぼれて
がをるもあはれ　ばらの初花
色香をめて、　手折る人もと
守の神の　針やたびけん
道行く人も　かへりみながら
手にだにふれず　今日も昨日も
かくてはやすく　散るまでを見ん

卯の花　同人

時ならぬ　雪といひふり

音たてぬ　波とかけつゝ
昔より　めでし卯の花
今もなほ　めづる卯の花
朝露に　色はかゝやき
夕月に　光にはへり
垣のうの花。

首　夏　くさ

去にし日に見し　花さかり
いつしかかはる　若みどり
花にはつらき　風をしも
いとゝ待たるゝ　夏は來ぬ
小川のながれ　ゆるやかに
暑からぬ程の　日はさして
はらから二人　衣かゝけ
目だかすくふも　おもしろく

若葉のかげに　行きかひて
遊びにくらす　夏は來ぬ

螢　夏　くさ

庭の木たちに　只ひとつ
露の光と　見えつるは
暗を照らして　飛ぶほたる
いつ地の露に　わきてけん
我庭ちかく　こがれきて
暗を照らして　飛ぶほたる
學びの窓に　よび入れて
いざや學ばん　文のみち

初夏風　加藤ひな子

みどり涼しき　夏木立
青葉をわたる　ゆふ風に
ひとりたもとを　吹かせつゝ

我をわすれて　たゝずめり」
われはいとひぬ　花のため
けにも恐れぬ　鳥のため
されど夏たつ　今日よりは
そのゆふ風の　したはしき」

小林つね

夜　路

一、暗き山路にふみまよひ
　便らむ路をたづねつゝ
　木かげ出ればあなうれし
　燈火つゞく町の軒

二、なれぬ旅路にさまよひて
　たよらむ方も白雲の
　空飛ぶ星に誘はれて
　はつかに見ゆる人の家

金剛石

なでしこ

萬物中最も高價なるものはなにぞ、と問はゞ、われは金剛石と答へん。萬物中最も堅硬なるものは、と問はゞ、われは金剛石と答へん。

この貴き金剛石は、初はいかなる處にあるか、といふに、あるは晶形をなし、あるは顆粒狀をなして、蠻石又は稜蠻石中に產し、又川底の砂礫の中にまじりて存す。さて、產地にて古來有名なるは、東印度、ボルネヲ、ブラジルなどなり。

金剛石は、初よりうるはしき光をはなてるか。いな、金剛砂もてみがきて後は、じめて光を放ち、寶石としての價を增すものなり。金剛石のたふとまるゝは、實に其光線反射の著しきと、光彩の美なるとによるといふ。其色は、無色透明のもの最

も純粹なり。其他、淡黄色、濃黄色、綠色、褐色、青色、紅色などさま〳〵あり。

金剛石は、そも何より成れる、といふに、純粹の炭素の結晶したるものなり。されば、烈火にあへば、蒸發して炭酸又は酸化炭素となる。今其成分よりいふ時は、石墨、石炭など、同じき元素より成れるなり。されども、一は結晶して無色透明、かつ堅くて萬物中の至寶たり。一は結晶體にあらずして、黑色不透明の廉價なる物たり。そのたがひ雲泥とは、かゝることをやいふらん。

金剛石の貴きことは、今さらいはんもなか〳〵なり。寶物とし寶飾として、世界中最も名あるは、故英國女王のもちたまへりしものにて、そは重さは八匁ばかり、價は我千五百餘萬圓なりといふ。あはれ、心なき石だに、其貴きことかくのごとし。

人にして、なすことなく、徒に此世を送らんには、石瓦にもおとりぬべし。つとめざるべけんや。實に小さき金剛石は、われらをいさめてかゞやけり。はげまざるべけんや。

金剛石は、かく貴きものなれど、其光はいたづらに得たるものにあらず、みがきて後にこそ光はいづれ。人もまたかくのごとし。かけまくも、我皇后陛下のおほん歌に、このことわりを示させたまへるは、いともありがたきことゝこそおぼゆれ。我身に光をそへ、父母の名をあぐるも、我身の光をすてゝ、いたづらに此世をおふるも、おのも〳〵の心にあり。みがけや、人々、心の玉を。心に光る金剛石を。

我國には、金剛石を産せざれども、これにまさるものあり。そは外ならず、貴き寶の日本魂には

あらずや。あはれ、此魂は金剛石にもまして、堅き實にあらずや。君を思ひ國に盡す國民のまごころは、實に無形の金剛石なり。よしや有形の金剛石、國内にみち〳〵たりとも、日本魂なくば、いかで開明の代に此日本を進むるを得ん。世界の日本をして、鑛物界の金剛石たらしむるも、石墨たらしむるも、みなわれら國民の手にあるなり。つとめはげみて、世界の金剛石をみがけや國民。

金剛石といへば、まづ思はるゝは、かしこけれど金剛石の御歌なり。こを心の中にくりかへしつゝ、こよひしも筆をとりぬ。實石のことを書かんには、玉のごとき文こそよけれ、とは知れど、書をへてよみかへすに、瓦にもおとるをいかにせん。光のかたはしだになきをいかにせん。されども、ところ〳〵に記したる金剛石の三字は、文の光なきをおほひやせん、とたのみてかくなん。

明治三十四年五月二十八日　皇后陛下御誕辰に當りて記す

むだがき

うの花

五月雨の、ふりみ降らすみ定めなく、我宿にのみとぢこもり居て、文机に向ひ、ものゝ本よむとはなしに、古き反古など取出し見るまゝに、去年の今日、友よりおこせたる文をなん、見出しける、なつかしさに、そが寫眞とり出てゝ、打見やるにまの當り相見るこゝ地して、いとうれし、されど今は遠く立別れ、相遇ふとの、難ければ、なつかしさ、いやまさりぬ、思へば幼きより、文よむこと、裁ち縫ふわざも、諸共にはげまし、はげまされ、手とり交して遊びしを、ゆくりなく、立ちは

かれしより、早や三とせとぞなりにける。

過ぎにし歳の今日此頃、五月雨のふりしきる夕、二人手をとり「故郷の空」てふ唱歌を、うたひ出しに、友も我もかたみに涙さしくみて、返しの歌は、得うたはずして止みぬ、寫眞ながめつゝ、ありしことゝも思ひ出てゝ、西の空なる友を戀ふる折しも、ほとゝぎすの一聲高く、雲井に啼きて過きにけり、あはれ血になくほとゝぎす汝もあはれを告げぬらん思ひもつ身の千々にくだくる我こゝろ、筆にかりてかくなん友の許に云ひおこせぬ

說林

女子の地位は如何に進歩し來りたるか

勝又鄭次郎

太古野蠻の時に當ては世界何れの國に於ても女子は男子の附屬物の如し、女子は性來概して柔弱なるを以て男子は自由に之を左右し之を賣買して怪まず、或は戰爭の賠償として之れが授受をなし且腕力を主とする時代の弊風として、之れが資格を缺ける女子の地位は甚低かりしが彼の希臘に於

ける「スパルタ」の尙武敎育は兒童敎養の必要より婦女子の位置を高めて家庭の中心となし男女殆んど同一の敎育を受けしむるに至れり、玆に於て女子の地位は第一の變化進步を爲せりと云ふべし、之れに代れる「ローマ」人又一夫一婦の制を厲行して女子の權力を高め女子中又敎育を受くるもの多かりしが「クリスト」出てゝより女子の位置は著く進步し女子の權力は玆に第二の發達を爲せり、何となれば基督敎に於ては男女を平等とし親子夫婦の間を神聖として一夫一婦の制を嚴定したるを以てなり

騎士の制度は更に女子の權力を加ふるに力ありき、何となれば彼の「ナイト」の制度に於ける武士敎育なるものは少女の爲めに特殊の學校を設け若くば城中に於て之を敎育せしのみならず淑女を敬愛して之に服從すること甚しく、城中に於ける淑女の一笑は武士の爲めに無上の光榮にして、其一顰は至極の苛責たりし事明なればなり、彼の男子年廿一に達して將に武士の列に入らんとするや其誓詞中に云へるあり、曰く

常に婦女子を庇護し自ら罪を犯さず
惡事を爲さず、又力を盡して貴婦人の榮譽を
保護せん、

と、いかに暗黑時代と呼ばるゝ中世紀に於て此の光榮ある歷史の存するかを見よ、女子の權力は此の時に於て第三の進步を爲せりと云ふべし

斯くて「コンスタンチン」都の陷落あり、文學復興し宗敎の改革行はれて一般の敎育も進步し、女子の敎育を主張するもの多く女子が家庭及社會に於て緊要の勢力を有するもの多かりしが殊に女子

の權力を進め其地位を高めたるは殖民地の移住にありとなす、就中主として米國の殖民にありとなす、今日吾人の耳にする男女同權の文字は全く米大陸に於て大に發達せるものなりと云ふべし、然して米國は何故に女子の權力を高めたりや、其理由少なからざるべしと雖も主とする處左の二點にあるべし

(一)新開の大陸は先づ男子に由て移住せられ女子の數は男子に比して少なかりしを以て從て幾多の男子は女子を敬愛し若くは男子の代理に當て、其の位地と權力を高めたること

(二)大西洋萬里の波濤を越えて故里を捨てたるもの自由を愛するの精神厚く且新殖民の常として舊慣を打破して女子の位地と權力を高ひるに容易なりしこと

これなり、こゝに至つて女子の權力は全く男子と同じきに至り、其弊往々男子を凌駕するに至れるは歎はしきの至りなり、彼の獨立の檄文を見るに其冒頭に於て「凡そ人類は同等に創造せられたるものなり」とは米人が男女間の關係を言ひ表はせる適當の文辭なりといふべし

歐米に於ける女權の發達此の如しと雖も、我東洋に於ては如何ん、嘗て神代に於ては男女同權ありと論せし學者あり、否らずとて之を論駁せる博士あり、實に當時のことは茫として辯ずべからず其後國の主宰者としては神功皇后あり、元明元正の聖帝あり、文士としては紫、清少あり、勇女としては巴あり、板額ありと雖も、女子の權力は進歩したりとは見えず、殊に封建の制堅く戰國の代腕力を主とせる元龜天正の時に當つては女子は益

卑境に沈淪し去りたるが如し、何となれば封建の代は唯武をこれ偏尚し腕力武力あるものに非れば社會の尊敬を受けず、殊に戰國亂雜の代に至つては干戈これ用ひ、殺伐これ事として兵亂絶ゆることなきを以て、强勇之れ先に、功名これ事として、强壯の者に非れば何の勢力を占むる能はざるを以て、天性嫩弱なる女子が輕蔑せられたるも怪むを要せざるなり、これを他にして儒教と佛教とが女子の位地を低めて權力の伸張を妨害したることも甚明なり、此の二者は一方に於ては我國民の道德を維持し我國民に教へたること甚多しと雖も他方に於ては亦多くの缺點を有することも忘るべからざるなり、先づ儒教に就きて之を見んか、曰く

婦人伏於人也、是故無專制之義、有三從之道、在家從父、適人從夫、夫死從子、無所敢自遂也、教令不出閨門、事在饋食之間而已矣、是故女及曰乎閨門之內不百里而奔喪、事無擅爲、行無獨成、參知而動、可驗而後言、晝不遊庭、夜行以火、所以正婦德也

女子與小人爲難養也、近之則不遜、遠之則怨

婦有七去、不順父母去、無子去、淫去、妬去、有惡疾去、多言去、竊盜去、

と

佛教に於ても亦然り、よく我邦下流社會の道德を維持したるの功多しと雖も、冥々のうちに女子を輕蔑し來たりたるの責は到底之を受ること能はざるべし、曰く

女身垢穢非是法器

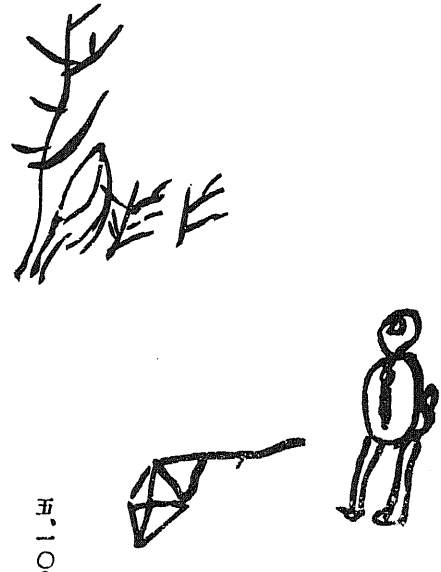
女人身有五障

と、又法華經の藥王菩薩本事品中に於て、極樂の有樣を記して曰く

ワシントンと其父

彼國無有女人、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅等及以諸難、地平如掌、

と、此の如く我邦の女子は自ら權力なく、自ら地位低きものとして德川氏の末葉に達せり、然るに宇宙の大勢は我邦をして王政復古の止を得ざるに至らしめ、開國近取の必要を迫らしめこゝに於てか我國の情況一變して、女子の位置と權力とも亦大に變化せるを發見すべし、此等は、こと凡て現代に屬するを以て今茲に詳說するの必要なかるべしとも、彼の民法の實施の如きは大に注意すべき一要件なりとなす、これを一千年の昔大寶令に見るに庸調は其課する所獨り男子にのみ、口分田に於ても男と女とに於ては二段と一段百廿歩との差あり、又三代實錄に見るに當時土地の分配は獨り、男子に



五、一〇（男）

はもと佛國の學者「ポアリナード」氏の立案にして羅馬法の系統を引ける佛國の法典に基づきたるも爭ふ可らざるの事實にして、自然一夫一婦の制を嚴定せる基督敎の主義を加味せるは甚明白なり其始めて世に公にせらるゝや批難百出したるを以て、後日大に改正せしと雖も父子兄弟夫婦の關係は之を在來に比して大に變化せりといふことを得べし、何となれば個人の權利を重ずること舊道德の家族を重ずるに反し、彼の七去三從と云ひ且舊時の法律は其成文と不成文とを問はず女子は法律上權利の多分を削り去られ有夫妻は獨立して財產に關する契約を結ぶ能はざりしが、民法に於ては協議上の離婚あり、相應の協議、相應の理由あるに非れば、結婚の取消離婚の請求を爲す能はざるが如き、又限れるが如し、此等の制は全く長く行はれた事に非ずと雖も、こは儒敎的法令の好良なる代表にして、これを今日の民法（歐洲流）に比較する時は果して如何、勿論前者は全く家族制を根底とし後者は個人制を根底とするを以て斯くは非常の差あるなり抔極言するものに非ざれども、然も此の民法

有夫妻が特有財産を有するが如き何れも夫婦間の關係に於て注意すべく、從て女子の權利と地位とは舊時に於て成文上に於ても大に變化進歩せりと云ふべし、此れ成文上の現象なりと雖も、其他國家全體の經濟上の打算より、若くは男女分業の方面より、若くは家庭教育と社會調和の方面より女子の地位は日に駸々として上達し、これに適ふ女子教育の機關亦日々備はりて、我邦の女子は幸福なる位置と至當なる權利とを有するに至るべし豈有りがたき聖代の現象に非ずや　（完）

紫陽花の雫や地にも花の跡

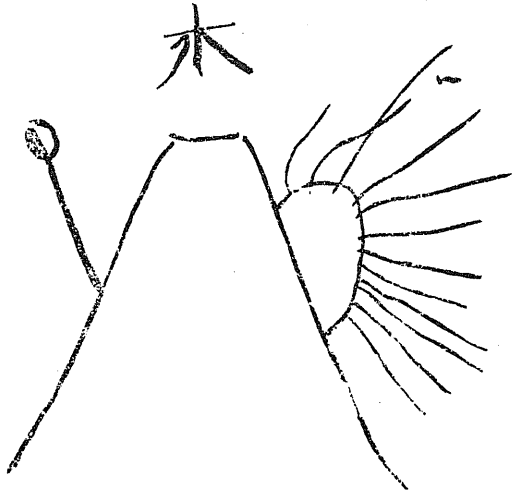
寄書

健康と家庭

秋影生

椿萱並び茂り、夫妻共に健に、兒女嬉々として其間に戯る、一家團欒の樂、何物か能く之に加へむや。而も一人病に臥して呻吟する者ある、家を擧げて愁眉を閉し、一道の暗雲屋を覆うて春光室に入らざるの感なくむばあらず。況んや病更に進むで再び起たざるの不幸を見るに至ては、非痛誰か能く之に堪ふる者ぞ。若夫れ百年同棲を契りて鸞鳳比翼未だ久しからず、一朝死別に逢ふ、人生の恨事寧ろ此の如きあらむや。殊に可憐の遺兒有

るに於ては、其兒をして片親の不幸に泣かしめ、長く家庭の和樂を得ざらしむ。假令後繼の人を迎ふるも情に於て解け難きものあり、所謂繼兒根性を養成して、猜疑摯拗等不健全の思想長じて猶拔



五年六ヶ月（男）

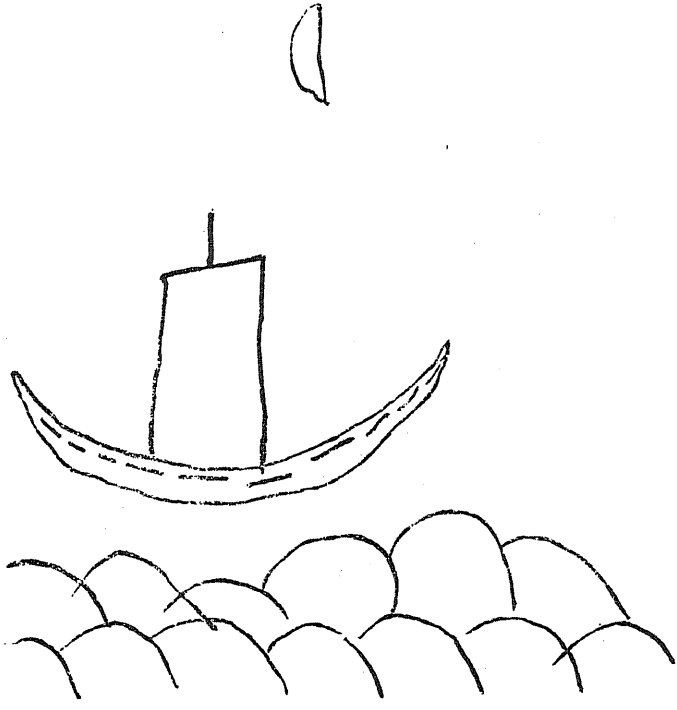
けざるに至るは往々見る所なり。

配偶の健否の、家庭の和樂に關するも唯之のみに非ず、俚諺にも子は夫婦の鎖と言へるが如く、小兒に由て家庭の和樂を維持するや多大。小兒は家庭の帝王なり、父母に在ては掌中の珠にも比す可く、之が爲に希望を興起し、之が爲に失意を慰籍せらる、小兒なき家庭の如何に寂寞たるかを見よ、而して生殖はもと配遇の健否に關す、古へ婦人七去の戒あり、其一に子なければ去るといへる、子無きを以て獨り女性の罪に歸せるが如きも是れ偏せる耳。

去れば、配遇を撰ぶに當りては、須く先づ其健否を問ふ可き必要あり、畏けれ共嚮に東宮納妃の砌、主として身體の健康なる者を撰ばせ給ひしと、潛に洩れ承る所なり。

然れ共配遇を求ひるは獨り生殖を行はんが爲のみに非ず、故に身體にして健ならば其他を問はずして可なりとは言はず、只重要なる一資格として之を擧ぐる耳。

想ふに配遇の成立は愛情の結合に由る、愛情なき配遇は道德に悖戻せる者也。然るにわが邦俗の婚姻に於る、先づ媒者の言に據りて男女互に知り次で門地血統を糺して約諾す。未だ果して相愛纏綿百年同棲を得るや否やを識らざる也。假令當事者に於て不服あるも、壓制的東洋道德の勢力を以て、父母の干涉に背くを得ざらしむ、殊に男尊女卑の習よりし



て一切の權利は男子に歸し、若し妻女にして其意に滿たざるあらば、之を逐うて新に替ふると弊履の如く、俚諺に所謂疊表を以て之に擬するに至る。是を以て女子の婚嫁を見る、武士の戰場に向ふの想を爲し、父母の之を戒むる、亦その死すとも生家に歸るなからむを以てす。女大學に曰く、

一度嫁しては其家を出ざるを女の道とすると古聖人の訓なり云々、女は一度嫁して其家を出されでは假令二たび富貴なる家に嫁すとも女の道にたがひて大なる辱なり

と、されば婚嫁の事たる、女子に在りては一面は幸福にして一面は苦痛たる也。而して若し未婚の男女相愛するが如きあらば、非常の罪惡として嚴譴免る所なからむとす。彼等は情に背き涙を飲ひで壓制的干渉に屈從せざる可らざる也。夫れ此の如くにして成る所の家庭の、無味索寞時に風波の起伏を見るもの素より其所ならずむば非ず、況んやかの容貌に婚し、財產に婚し、爵位に婚する者をや。畢竟愛情なき婚姻は不道德の甚しきもの也。

夫れ然り、而して所謂愛情とは、固より健全なる意志の支配を受くるものをいふ。かの容貌風采の美をのみ着て相狎るゝは、狂蜂痴蝶の花に戲るゝ類、飽けば則ち去て他に就かむのみ、是れ男女互に弄ぶもの、固より永遠の希望なき也。外面の美を愛するは動物的情欲のみ、外面の美は內心の美に若かず、況んや人は常に少壯ならず、紅顏能く幾時ぞ、只內心の美は終生替らず、寧ろ老成に由て之を加ふるある也。この內心の美を觀破して、終生の苦樂を共にするに足るや否やを分別す

るは卽ち健全なる意志の判斷に待つ所、而して後相婚する、以て道德に合し幸福を傷けざるを得ひも也。

姻婚の愛情を基とするは既に說けり、而して愛情は專ら精神上に關す、然れども吾人は更に想ふ、不健康者を愛するは一種の罪惡に非るかと、夫れ子孫蕃殖は人類自然の大道にして造化に負ふ所の義務、男女互に配遇を求むるは此義務を果さむが爲なり。然るに身體虛弱、生殖不能なる時は、自然の大道に背くのみならず、將來家庭の幸福に缺陷を生じ、永遠の和樂を損するに至り、延いて國家に及ぼす影響の多大なるものあり、されば一二の疾病は、特に法律を以て其患者の結婚を禁じたる國あり、瑞典に於て癩癲、米國諸州に於て梅毒結核精神病、獨逸に於て癲病等、何れも其患者の結婚を嚴禁したるが如し、是れ其の遺傳もしくは傳染に由りて害を流し毒を貽すを以てなり。蓋し不健全者の配偶を避くるは、實に社會に對する德義にして國家に對する義務なりといふ可し。之を要するに配偶者を撰ぶに當て、愛情を基とすると共に、更に其健否を省みざる可らず、これ實に家庭の圓滿を企圖し、社會の福祉を增進せしめ、國家の隆運に貢獻する所以の道なればなり。

近刊の時事新報に載する所頗吾人の所說と符合せるものあり敢て轉載して讀者に紹介せん

○結婚者の資格　米國インヂアナ州の州會議員リンドラーといふ人は、男女結婚の資格を制限し、其間に生れたる子女をして强壯純潔ならしめんとの目的にて、一の決議案を同州會に提出したり、即ち其方法は醫師法律家を以て委員となし、結婚及其影響に關する一切の問題を調査せしめ、其調査の結果に基きて草按を作り、州會の決議を經て法律となし結婚し得る者の資格を制限せんとする者に對して、大略左の質問を設け、善く其質問に應じて結婚の資格あるを認する者にのみ之を許さむとする

奇案なりと云ふ

(一)汝の體力は結婚するに適當するや。

(二)汝の知り、且つ信ずる所にて汝の家族中に生れながら病氣に罹り居る者なきや。

(三)汝の一二三四等近親屬中に腺病、頸腫、結核又は是等に類したる慢性病に罹りたる者なきや。

(四)汝の父母の中に飲酒を嗜む者なきや、又飲酒にて死したる者なきや。

(五)汝は平生アルコホルを飲用せざるや。

(六)汝の父母、祖父母、玄祖父母、曾祖父母の死亡は何に原因したるや、若し出來得るならば更に汝の曾々祖父祖母の死亡は、何に原因したるやを明にす可し。

(七)汝の四代目の先祖までの中に刑法を犯せしものなきや。

(八)汝は生命を保險に附するに適せざる病なきや。

(九)汝は中風症の傾向なきや、又汝の近親中に中風にて死したるものなきや。

老爺の話

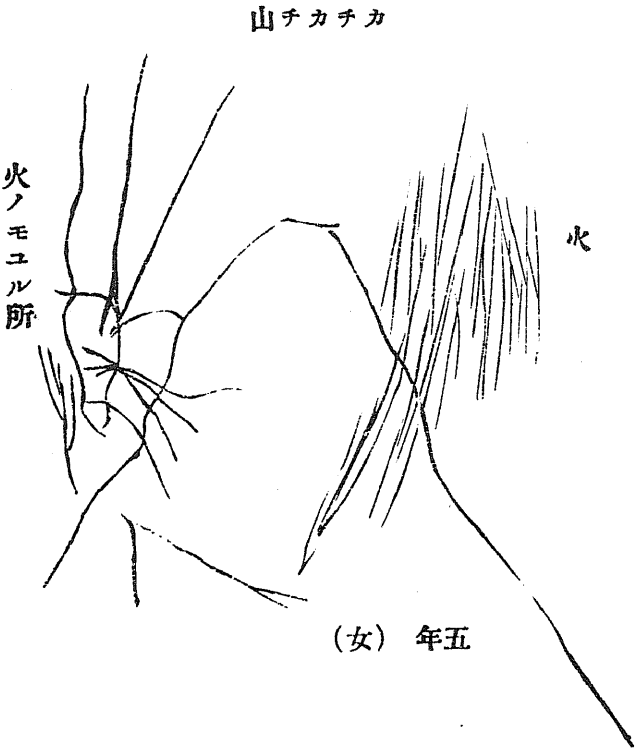
愛讀女

私の裏に、少し斗りの畑がありますがもー此頃は茄子や黄瓜の植付をする時節でありますから、下ごしらへをするために、いつもくるぢいやを頼みました所が、すこしかげんがわるいと申てとなりのぢいさんが來てくれました、おひるすぎ御茶を入まして有合せのお茶受など食べながら色々の話が始まりました。

己らー九人小兒を持ちやしたが、五人が男子で四人が女でがんす、もー男の子は皆一人前で二人して或時は二兩少ない時でも一兩半位ひはもうけてきやんすので己らー今では少しは樂になりやしたが、なか〳〵小供の少さい時は人には云へぬ程隨分苦勞をしやしたけれども有難い事にやー己らーの子供は、皆風でも引た事がなしで丈夫でがんすよその子供さん達が頭に腫物が出來たり又眼がわるかつたりするのを見やんすとまことにきのどくでがんす己ー若い時から酒も呑まないし又「だる

まや」「お女郎屋」などへは友達に誘われた事も有やんしたが、一べんも行た事がないおかげで悪病氣などがないためか己らーの子供等には少しも腫物なんかなくて病しらずで結構でがんすと、げに滿足らしき顔をして話すを聞て、私は實に云ふに云はれぬ感じにうたれました、世のお子さんを御持ちなさる親達よ、此無教育なるおぢいさんの根本的の衛生を守つて居た結果の話を聞ては如何に御感じなさりますか。

地位あり、教育ある紳士達よ小兒が悪しくなりて後氣が付きても最早おそいです、よき家庭を造り、強壯なる小兒を育てんとならば、よろしく自ら根本的衛生を守つて先きのぢいさんに愧ぢざるよふに大に驚醒しなければなりませぬね。



（女）　年五

中の〳〵小佛

美濃　坂井長光

初めて兒童に教ふべき材料に於て遊戯唱歌のみは大人が撰定したるものを無心の兒童に教ふべきよりは、風俗に關係せざる以上に於て、其地方在來の歌を其地方自然の調子に唱はしむるを遙かに優れりとす、今左に美濃地方の兒童遊戯法及其唱歌を記す。

ト音	4	2	1	2	1	2	1
	ナカノナカノ	ヨギトケー	ナぎもか	ヒクイ	2	2	2
	2	2	2	1	2	4	2
	オナンヒニ	サカナクッタデ	ソンデもか	ヒクイ	1	2	1
	2	—	2	2	1	2	1
	モー一サ	イッスン	タヨナレ	ヨ	2	—	—
	2	1	2	1	2	2	6
	高が	5	未だ	に	底く	鍋の	中の
	5	5	青で	食べた	浦の	蛙が	〳〵
	な	れ	蛙が	で	日	小	
	。						

遊戯法

兒童何十人なりとも圓陣を作り中に撰定したる一人を容れ、歌を唱ひながら左進行をなし、一曲終る毎に進行停止且蹲る、此時中の一人は各兒童一人づゝに向て、凡ての草木或は鳥獸に於て名を稱へしめ、最後に衆兒より中の一人に向ひ、お前は何人だと尋ねしむ中の一人は最も恐ろしき物の名を稱すれば、各兒童は恐れて解散し逃げ廻るを一人捕ふれば、再び圓陣は作られて前遊戯に取掛るを例とす、其解散して再び圓陣を作るとさの早さ余は其自然遊戯の制裁に感服せり。

樂曲は自然の音調を風琴ヴワイオリン等に依て調べたるものなり是によりて唱歌教授を導き後に至て道德的の歌を教へなば易からんと考ふ余は各地方の俗歌の調子までをも知りたし

六月の自然界

刺ある葉の形も黃紅の花の形も、共に薊に似たれども、やがては臙脂となるべき紅花は、邊鄙の乙女の手に摘みとられ、力なげなる一重の花瓣が、翔ける燕の羽風に散らされて、靑綠なる罌粟は、裸の小坊主をさし出しぬ。

蠶は眠りて又起さぬ、はや繭を造りそめしものもあらむ。麥は黃ばみぬ、熟らばやがて刈られなむ、木棉も種、黍、稗、胡蘿蔔などの種、西瓜の苗などは、刈りとられたる麥の跡などに蒔かるべく植ゑ付らるべし。

月の十二日は入梅とて、此頃より小粒になりて降りそむる梅雨は、女性の如くをとなしく、傘に當りて音もせず。或は三日或は四日五日と横に斜に浮ぶが如く飛ぶが如く降りつゞく。或夜ひそかに松の月みる亦面白し。

梅雨の中に長き穗垂れて柿色の花咲けるは栗の樹なり、靑葉の間にノコ〳〵と圓顏つゞき出せるは、高き梅の樹の實の黃色に熟せるなり、低き覆盆子の實の紅色に熟せるなり。

農家は、殊に忙はしくなりぬ、苗代に手をついて歌申上ぐるは、無調法なる蛙なり、袖ぬらしつゝたゞ苗を植ゑ移し行くは、やさしき鄙の乙女なり。

新竹は、なよやかに高く聳え、芭蕉は、廣く舒

びて鷹揚なり、白き赤き紅のさま〳〵の薔薇の花は垣根に匂ふべく、蘂蕊、燕子花などは、今を盛りと咲きまさるべく、訪ふ人の絶え間なき名に負ふ園は、いふまでもなく、人の來ぬ、山の裾に、水際に人手を待たず獨り悠然と咲きはへたるも、思ひやられて、眼に見ゆる心地す。

若鮎の、夜暮に川の早瀬をのぼり來て、勇ましく跳ねたる、螢の、路細く追はれぬ澤の葦の間にきらめける、飛んで淡墨色の森の中にさまよへる、など見ん人もあらじ、夜は更けて何處に行くらむ杜鵑の唯一聲を既にかすかに聽きしなるべく、幽かなる柴の戸敲く秧鷄を聽くもこれよりならむ。

野末の小溝の蘭の莖の、泥より出でゝ細長き胸の邊に蜻蛉の衣更して軟かき背乾し居たる、さながら戟さし上げし澤潟の下に鮠の一泡吹き洩したる、川骨の側の藻の間に丁斑魚の長閑に浮び遊びたる、行きて今月の水邊に立て、更に多くの趣きあらむ。

あゝ此月の草よ、樹よ、花よ、實よ、蟲よ、魚よ、鳥よ、雨よ、流よ、夕暮よ。（摩訶生）

机邊餘錄

▲澤山な知己の中には、どうしても自分と感情の合はぬ人がある。別に、其人が、自分に對して惡意があるでない、また他人に對しても、どうと云ふこともあるではない。然しながら、自分は何處までも、其人と氣が合はない。其人に會ふと忽ち何だか一種言はれぬ惡感情を發する、そして其人の爲ることなすことが、どうにも氣に食はない。こういふ樣な人が、よくあるものであるが、自分

は、それは矢張り一種の我儘だらうと考へる、そして一種の嫉妬心も加はつてるかの樣に思はれる。

▲世の中には、又無暗に、自慢したがる人があるものだ。其自慢にもまた、いろ〳〵種類があるが、要するに、この自慢と云ふものは、つまり自分を大きく見せようと云ふのであつて、八釜しい言葉で、いふと、自己擴張という動機から、出てるのである。

▲所が、人によると、對手が無暗に、自慢をしてかゝるのを、非常に嫌ふ人がある。どうも彼の人と交際するのもいーが、あゝ吹かれては困る。とこふ言つて、なるべく交際を避け樣とする。然し、能く、考へて見ると、何も、自慢する丈のことは、一向罪のない話なので、のみならず、默つて其人の自慢を聞いてやるのは、大に其人に對して、功德になるので、向ふはそれで以て、頗愉快を感ずる、といつて此方に損の行く譯でもなし、だから多少、厭な所があつたにしても、辛捧して聞いてやるのが、亦交際上の一の義務である。

▲然し、自分の自慢の爲に、他人を引合に出して他人の惡口をいつて、夫で自分を高めるに至つては、自慢も、決して罪がないとは、云はれぬ。

▲前號だつたか、他所へ御客に行つた時分には、極仲のいゝ間柄などでは、主人も妻君も一所に出て來て呉れて、應接して呉るのが、御客に取つては、頗る愉快に感じるものだと云つたが、之と反對に、世の中には、隨分妙といはうか、酷といはうか、甚合點の行かない主人がある。

▲それは、こふなので、せつ人が行くといふと

お客の前であるにも係らず、無暗に、妻君を叱り散らすのである。其人の平素は知らないが、兎に角人が行くと、いやもー散々に叱り散らして、側で居るのもまことにつらい程なのだ。あまり妻君に氣毒でならないからつい用事も、倉々にして出て來る樣なことが、度々あつた。

▲世の中に何が分らないといつて、これほど分らないことはまづあるまい。つまり其主人の考といふのは、こうなのだろう、己などは、妻を御するのは、こんなものだ、決して世の鼻下長などの樣に、尻には敷かれない、とまあこういふ大器量を見せる積りなのだろうしかし、恐らくこれほど間違つた考といふものはない。第一お客に對して失敬である、次に自分の家庭の不調和といふ内兜を人に見すかされるといふ、ものなのである。

▲例令平素は、どれほど中が惡いにしても、よし一歩進て、今の今まで、爭つて居たるにしてもさー客來といふ時分には、丸で打つて變つて、そんな氣ぶりは、ちつとも見せないで以てやつて退けるといふのが、最感心の仕方なのである。

▲どの位、仲のよい夫婦にした所で、そりや朝から晩まで一年三百六十五日、一所に住つてるのだもの、會には、女房の方からの氣儘も出よう、夫の方からの我儘も出よう、そこで多少の爭も始まらぬとも限らない。こんな時分には、そりや夫は男だから、隨分腹の立つ時は、女の頭の一や二やなぐりたくもなるものだ。さればといつて、こゝでなぐりつけて仕舞つては一向に榮えないので、男の器量といふものが、たゞ一段と下がる丈に過ないのだ。

▲そこで、こう云つた人がある。『そりや　どれほど辛棒して居つても、妻に向つては、隨分腹が立つこともある、然し、一體が、どうしたつて妻といふものは女で、自分より考が足らないのだから、こんな氣の利かないこともやるのだと思つて我慢して居る。それに又、時々妻の善いことなどを、書きつけて置いて、萬一、腹の立つといふことのある時分には、そつとそれを開いて見て、今日は　こんなつまらないことを仕でかしたが、しかし平生は妻だつて、こんな善いこともしてるのだと考へ直して、夫で以つて、我慢して行くのだ』

（聲水生）

音樂的趣味の缺乏

甚しきかな我邦人の音樂的趣味に缺乏せること。琴三絃の如き鄭聲の樂は、至る所の社會に歡迎せらるゝに係らず、高尚壯嚴なる西洋樂は、遂に之を聞くの耳なきなり。毎年何回か開くる東京音樂學校の演奏會には、聽衆立錐の地を餘さずといへども、併も之を解する者としては、まことに寥々にして、其多數の人々は、寧淺草の球乘のはやし方遙に愉快を覺ゆるなり。聽衆の多數は、演奏の曲目さへも殆分らぬなり。嘗て同會に臨みての歸るさ、まさに校門を出んとするや、高襟の一紳士呆然として其友を觀みて曰く、「嗚呼樂隊の方が、どの位か面白い」多數は大低此の如しと見て差支あらぬなり。

音樂的嗜好の低きは、實に品性の高尚ならざるを示すものなり、風俗の純良ならざるを示すものなり。イツ節やストライキ節が縱横に勢力を逞

しうする間は、とても、音樂的趣味の發達どころにあらず、品性風俗の改良も亦容易に望むべからざるなり。

公德の缺乏と私德

名は、公德問題といふといへども、實は私德問題なり。所謂公德問題なるもの、其意味頗漠然たりといへども、要するに、或一定の人若は場合に對する德義にあらずして、一般社會に對する德義なり。即何人を問はず、如何なる場合を論せず、凡べてをよくせんとする道義心の發表に外ならず、換言すれば博愛衆に及ぼすに外ならざるなり。これ實に道德の極致にして其完全に達したるもの、此の如きは、私德の完全ならざるものにあらざれば、よくすること難し。公德の支離滅裂は即、私德の不能不完全を顯はせるもの、廿世紀の序幕開けたると同時に公德の缺乏を絶叫せる國民は、遂に其根本たる私德の缺陷を覺らざるが如し。願はくば、名のみならずして實ある私德を涵養せよ、願はくは、形式のみに走せずして內容ある私德の實行を勉めよ。源泉の汚濁を顧り見ずして、徒に末流の清澄を望む、吾れ、誠にその効なきを知るなり。

改良衣服

一方に於ては、尙議論の熟せざる時に當て、他方に於ては、もはやドシ〳〵實行せらるゝに至りぬ。區々とはいへども、昨今東京市內の此處彼處に妙齡の女學先徒の、所謂改良服を身に纏うて、散點しつゝあるを見る。とに角かゝる問題は議論

の纏まるを待つて居る樣にては何時まで待つとも實行の曉には違し難し。議論の可否は既に決したり。只其纏まらざるは、裝飾形式の上に在り。此の如きは到底一時に決して、一時に行はるべきにあらず。漸次改良に改良を加へて完成せらるべきもの、婦人諸君、各自に於て各團體に於て、苟も一個の考案成らんか、乞ふ奮つて先づ自ら、着用せられよ、若しくは自家の子女たちに着用せしめよ。缺點と優點とは、かくして實驗の後初めて眞に改良進歩せしむるを得ん。（以上三件牧羊生）

●女子高等師範學校教授の出張。黑田教授は過月女子教育視察として東北地方に、篠田教授は岐阜縣教育會に　中村教授は　大阪に於ける京坂神連合保育會に列席のため、それ〳〵出張せられたりしが何れも先月中歸校せられたりとのことなり

●東京音樂學校音樂會　同校に於いては、今般中學唱歌集刊行せしを以つて、其披露として客月十九日同校奏樂堂に於て盛なる演奏會を擧行せし由

●文部省夏期講習會　本年開設せらるべき文部省夏期講習會の時日、場所學科等は左の如く定まれりと。

一、開會期限自七月二十五日至八月十四日

一、開會地、東京仙臺京都金澤熊本福岡

一、講習學科目　教育法制及び經濟國語及び漢文學校の建築音樂理科家事、東京、歷史博物(仙臺)英語(京都)數學博物(金澤)物理化學(熊本)普通體操(福岡)

一、兼習を許すべき學科目は東京に於ける理科家事熊本に於ける物理化學とす

一、地方長官の選定すべき講習員は六月十五日迄に選定書を文部省に差出す樣知事に於て取斗ふべき事

一、地方長官は定員外に於て各學科目に就き豫備員として各一人を限り特に選定することを得

●私立女子技藝學校　東京市教育會の施設にかゝる同校は愈本月より開始する筈となれり。左に規則及學科課程表を記さんに

私立女子技藝學校規程

第一條　本校は私立女子技藝學校と稱し當分麴町區飯田町四丁目一番地私立雜松小學校內に設置す

第二條　本校は修身國語算術裁縫割烹其他家事に屬する事項を教授する所とす

第三條　本校に入學することを得べき者は年齡滿十二年以上の女子にして尋常小學校卒業以上の學力を有するものに限る

第四條　本校の修業年限は二ヶ年とす

第五條　本校の學科課程は別表に掲る

第六條　本校の授業は毎日午後三時間とす

第七條　本校の休業定日左の如し

一　大祭祝日　日曜日

一　五月二十八日　皇后陛下御誕辰日

一　夏季休業　八月一日より同三十一日に至る

一　冬季休業　十二月二十五日より翌年一月七日に至る

一　學期末休業　六日以內

第八條　本校の生徒は授業料として毎月金七拾錢を納付すべし

第九條　入學願書式左の如し

但し保證人は市內在住者にして丁年以上の者たるべし

入學願書式

本籍族稱(誰妻、誰長女、又は何女等の類)

現住所　何　誰　生年月

右者今般貴校に入學致度在學中は御規則相守違背仕間敷別紙履歷書相添此段相願候也

年　月　日　右　何　誰

右保證人　住所　何　誰

女子技藝學校長宛

第十條　退學せんとするときは保證人連署を以て願出づべし

第十一條　毎學年の終に於て平素の成績を考査し其進否を定む

第十二條　本校を卒業したるものには左の證書を授與す

族稱　何　誰　生年月

右は本校の課程を履修し正に其業を終へたるを證す

年　月　日　私立女子技藝學校長位勳氏名㊞

第十三條　本校生徒にして品行端正學業優等の者には之を表彰することあるべし

第十四條　本校生徒にして其體面を汚辱し又は不都合の行爲あるものは退學を命ずべし

女子技藝學校學科課程表

學科目	學年	毎週時數 第一學年	毎週時數 第二學年
修身	一	人倫道德の要旨作法	一 同
國語	二	讀方、綴方	二 同
算術	二	四則、比例	二 同
裁縫	一〇	裁方、縫方	一〇 同
家事	一	衣食住、育兒衛生、家事經濟、編物等	一 同
割烹	二	調理法、獻立等	二 同
計	一八		一八

●女子英學塾　前に麹町區元園町に設立せられたる津田梅子女史の英學塾は其後追々好況を呈しつゝありとのことなるが、左に其規則を紹介すべし。

私立女子英學塾規則

主旨

一、本塾は婦人の英學を專修せんとする者並に英語教員を志望する者に對し必要の學科を教授するを目的とす

但教員志望者には文部省檢定試驗に應ずべき學力を修得せしむ

一、本塾の組織は主として家庭的の薫陶を旨とし塾長及び教師は生徒と同住して日夕の溫育感化に力め又廣く内外の事情に通じ品性高尚に體質健全なる婦人を養成せん事を期す

但生徒の都合により特に通學を許可する事あるべし

學科及修業年限等

一、學科を大別して必修科及び撰修科の二とす

一、學生を別ちて本科生及び撰科生の二とす

一、本科の入學生は滿十五年以上の女子にして高等女學校又は師範學校を卒業せる者若しくは之れと同等の學力を有する者且つ第四リーダーを習讀し之に相當する會話文法等の素養ある者に限る

但英學の力足らざる者の爲に特に豫備科を設く

一、本科入學生と同學の學力ある者にて特に一二の學科を撰びて修學せんと望む者は撰科生として入學する事を許す

一、本科の修業年限を三ヶ年とす

一、入學を許可せられたる者は金貳圓を納めて束脩とすべし
一、月謝は毎月貳圓と定む
　但全月缺席者は納むるに及ばず
一、入塾者は賄費として金六圓を納むべし
　但時價に因り增減あるべし
一、塾費は夏期金壹圓冬期金壹圓五拾錢と定む
一、月謝塾費賄料とも毎月五日迄に相納むべし
一、塾舍には家政に達したる舍監に監理を托し定員を小數にし衛生及び監督に遺憾なからしむ
一、音樂、圖畫裁縫等を別に學修せん事を希望する者には他の學科に妨げなき限り其便宜を與ふる事あるべし

塾長　津田梅子
外國教師　エー、エム、ベーコン
顧問　侯爵夫人　大山捨松

●女學校運動會一束　▲女子高等師範學校本科生徒は各月四日土曜日二部に分れ中山及大宮方面に同通學生徒は十八日中山方面に、附屬高等女學校は、同七日大森方面にそれ〳〵遠足を催されたり

▲華族女學校にては同月八日午前九時より同校運動場に於て運動會を開く、同日高輪御殿にまします常宮周宮兩内親王殿下にも御臨場あらせられ、生徒諸子の運動を御覽遊ばさる。▲東京府第一高等女學校に於ては同月二日稻毛方面に遠足を催せり

●道路左側通行に關して警視廳よりの注意、警視廳に於ては、過般來道路通行の安全を計る爲、道路通行者に對して、それ〳〵左側を通行する樣注意を與へ居れるが、一般人民をして、この習慣を得しむるには、まづ學校生徒より實行せしむるに如くなしとの意見より、先般文部省に交渉したる結果、同省よりは、此旨各學校に訓令して、それそれ生徒に、注意せしめたりとかゝ。

●東京市内に於ける浮浪學生　東京市内に於ける學生の總數は五萬人にて、其の中

一　公私中學在學生　一萬二千二十四人
二　醫學生（公私學校在學）　千七百二十四人
三　法學生（同上）　六千六百五十七人
四　農商學生（同上）　千七百七人
五　中學生相當（同上）　千人

六　海陸軍官立學校在學　千五百人

にして、其他の、一萬八千四百十八人は、一定の學籍なきもの、三千人は、一定の職業なく、學生とも親なし難きも、自ら學生と稱するものとす。即ち、浮浪學生は、實に、二萬有餘人の多數ありて存するなり。

（東京市教育時報）

●煙草の害　柳浪氏の煙草談として新文第一號に左の如く記せり。

僕は、先月中旬から腦の具合が惡くて　ちつとも筆取る氣にならなかつた　偶ま筆を持つても　如何いうものか　物を纏めるだけの思想と　勘忍とが出て來ない。處で、初の程は　睡眠の不足だらうと考へて　睡眠時間を充分に增して見た、　處が、何の効能も無い。

◎それから、いろ〳〵考へて見た、が其中、不圖、煙草のことに氣が付いた、僕の平常用ひて居るのは、原料舶來の卷煙草である、若しや是が、腦を惡くする毒因であるまいかと、直ちに廢めて見た「尤も絶對的に煙草を廢めると云ふことは、僕に於て實行し難いことであつたから、唯、是まで使用して來た卷煙草を、刻煙草に代へたまでのことである。

◎然るに即効がある、最初の一日は、何の變化も、効能も見へなかつたが、二日目、三日目になると、すつかり樣子が變つて來た。即ち今まで、くしや〳〵してゐた頭が、澄み亘つたやうに清々として來た。それから、思想も涌いて來る、根氣も出て來る、原稿も滯りなく書けると云ふ始末さ。

◎其處で、僕は、舶來卷煙草の大害あることを悟つた、否發見した、而かも實驗上から。

◎元來煙草を廢めると云ふことは、淘に難いことに相違ない、現に坪內雄藏君が、廢めた當時、二ヶ月程と云ふものは、非常に苦しかつたとのことを聞いて居る、僕だとても矢張然りだ、煙草が無いやうになると、起きて居られない其心淋しいことは實に話にもならぬ位である。

●東京市に於ける罪惡誘引物の數　警視廳に於ては本市誘惡類を分ちて左の種類となせるが其統計を見る者　誰か寒心せざらんや。

一、劇場

明治三十三年十二月末の調査に依れば、左の如し

大劇場と稱する者	約七ヶ所
小劇場と稱する者	約十二ヶ所
興業日數	三六七一日
木戸觀客	三四、八六六七
一幕限觀客	六八、七〇四〇

二、寄席並觀物場

寄席、觀物場の風敎に關するや大なり、左に揭ぐる所のものは明治三十三年十二月末に於ける調査に依る。

（イ）寄席營業者

興業日數（晝　一、二六七八回
　　（夜　四、五七八七回
入場人員（晝　八五、二四〇一人
　　（夜　四二六、七三二四人

（ロ）觀物場（常設　二〇ヶ所
　　（假設　一四七ヶ所
興業日數（常設　五二〇二日
　　（假設　一七八一日
入場人員（常設　一八九、一五五〇人
　　（假設　四一、二二一六人

（ハ）路上觀物興行人　四四人

此等の場裏に演出する所のもの、講談、落語、端唄、風義太夫の別なく、其多くは野鄙淫逸を以て視聽者の娯樂を得せしめんとせざるなし、其陋卑を談じ、淫逸を演ずること、實に其親たる者をして、其子女を誘引して赧顏の感あらしむる者、世間幾千人ぞや。

三、遊戲場

表に遊伎を示し顧客をして終に伎外に遊佚せしむる所多し、左に記するものは明治三十三年十二月末の調査に依る。

大弓	八七
楊弓	八三
球戲	七五
室內射的	二二
空氣發銃	九三
吹矢	三五
魚釣	二〇

而して右遊伎營業者の雇傭せる雇女は、約四百人。各遊伎場たる、其稱する所一個の逸樂を與ふべしと雖も、其營業者の婢女を雇ひ、遊伎者の同場を訪ふ者、果して單純なる逸樂を以て行くもののみなるか。

四、貸座敷

貸座敷の風敎上に著しき惡因を來たすはいふを要せず、明治三十三年十二月末の調査に依れば左の如し。

貸座敷	五〇〇
引手茶屋	一七〇
娼妓	五六一二人
遊客數	三二五、八二一九人
消費金額	四五四、五二一三圓
一人平均	一圓三十九錢五厘弱

公然誘惑を表示せる貸座敷に於ては、衞生、風敎の上に於て、事業の破滅、民力消耗の上に於て幾多激惡を流敷し、甚しきに至ては情死の痴態を演ずるもの多し。此等に要する其濫費の結果多くは精神の錯亂と爲り、沒德背律の行爲を見るに至る。

五、密賣淫

無敎育者の婦女、或は有敎育の婦女も、其家庭の紛亂と、生活の困難とより、法網の裏面に於て醜業を營むもの多し、今當局

の知り得たる明治三十三年十二月末日の市内に於ける調査は左の如し。

密賣婬	二八四人
媒介	六六人
客止	三二人

第六、諸營業の雇女

左に掲ぐる表は明治三十三年十二月末の調査にかゝる。彼等の贅澤をなす所の財源はそれ何れより涌出するか。

名稱	場數	雇女數
大弓		一〇〇
楊弓		一二一
球戯		五四
室内射的		一六
空氣發銃		四四
吹矢		一八
貸座敷		二七一三
旅舍		四三一〇
引手茶屋		五〇六
娼妓附添（禿の類）		八三
待合	四八二	一二六五
遊船宿	一七	五〇
貸席	六九	三七
料理	六〇一	二一四二
酩酒屋	八五三	三六九
喫茶店	一七六	七一
氷水店	四〇〇〇	三九〇
飲食店	六四五四	四四八六
藝妓屋	一四三三（藝妓に使用せ）	一〇二四
合計		一、七七九二一

（東京市教育時報）

●長野縣松本市學事狀況

同市は長野縣下の中央に當り教育上頗有望の地位に在り。現今は尋常小學校男子部女子部二ヶ所に附屬として裁縫專修科二ヶ所及幼稚園等合計生徒三千百有餘、教員數百八十餘人中學校一尙本年四月より高等女學校設立の運に至り尙將來小學校四、幼稚園二及師範學校をも設置する計畫にて前途中々有望の有樣にたち至りたり云々（同市松本小學校荒田良作君報）

●島根縣松江市女子教育の概觀

神門とも記

去月三十日雁と共に都の花の咲くをも待たで、北方の鄕里松江に歸省したりしに、中國の中央山脈を越えて、山陰地方に入れば、實に不思議、梅、櫻、椿及海棠は皆一時に咲き匂ひありき、謙遜なる菫の道側にところ狹きまで、しほらしく、笑ひこぼれしも

なつかしかりき、數聲の汽笛と共に突道潮の猛なる中海を横ざりて、大橋川上の機橋に上り先づ涙もて接したるは、舊師、親戚、及朋友等の迎なりき、翌日より短時日の間に、兼て案し置きし用事をなし終へ、其餘暇を以て訪問せしは、松江市高等女學校、師範學校附屬小學校幼稚園、女子講習所、女學會及郡部の一尋常小學校なりき、尋常小學校の外は、滯在中大樹春休中にして授業は見ること能はざりき、尋常小學は昔吾が未だ小學にありし時、懇篤なる教を受けし恩師の居給ふ所なるを以て參觀の爲にはあらざりき、されば詳かに松江の教育の有樣につきて記するは難しとする處なれども、不圖、目に附きたる處、感じたる處を擧ぐれば、概して校舍、清潔にして掃除よく屆き、物品の排置もよく整頓し、運動場には相當の裝置ありて、しかも、廣き庭に遺棄されたるものなど少しも見えざりき、郡部の小學は其内にも殊に清潔なりき、又師弟の關係には女子講習所、女學會、附屬幼稚園及郡部の小學校にては一種云ふべからざる溫情のこもれるあるを感じぬ。

該地方の女子教育は此一女學校と女子講習所及女學會に於て施さるゝものにして、此等の進不進は以て當地方女子教育の狀勢を卜するに足る幸ひにも吾が見聞したる所は有望なるものゝ如くなりき、殊に明年を期して再び女子師範學校の設置を見るに至るべきおや、

高等女學校につきて、職員は校長、橘氏を除くの外、女子高等師範學校出身者二名、尋常師範學校女子部出身者三名及當高等女學校出身者數名の三種よりなる、

寄宿舍は當校構内に設けられ疊敷にして、多くの室に分たれ、舍監室は稍奥まりたる處にて二た間を以て之に當て一は客間の如く作られたり、されば生徒をして來客の應接をもなさしめ得べく、炊事場は廣くして調理の實地練習せしむるに足る、只食室の少しく陰氣なりしは、物足らぬ心地せられたり。

女子講習所は師範學校附屬のものにして

イ、尋常小學本科正教員の養成

ロ、小學校專科正教員の養成

ハ、小學本科准教員の養成

の三種の目的を以てし、生徒數四十五名にして卒業後就職すべき義務あるものなり。

女學會は特志家の集りて、必要に應じて設けられたるものにして、其制は私立なれども、女子講習所を監督せらるゝ錦織竹香氏之を監督せらるゝを以て地方人士の女子をして當市に遊學せしめらるゝには實に便利にして又安全なる寄宿舍なり。

役員は

會長　本縣知事金尾令夫人和子

監督　錦織竹香

常置教員、山崎荻江

講師、錦織竹香、外、市内在勤の女教員十七名

書記、伴すゝ、福原きう、林しう

にして皆公務の餘暇を以て盡さるゝとなり、同會規則及生徒心得等は次號に紹介すべし。

●本會常會　本月一日女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會せり、詳細は次號に於て報道すべし、

新刊紹介

久保天隨筆

●醉人の妻　全一冊

細評は後日に讓るとして、こゝに輕薄なる我が文學社會に一異彩を放てる高等小說醉人の妻を紹介するを得るに至れるを喜ぶ。原書は誰も知る教育界の偉人ペスタロッヂー氏の「リーンハルドとゲルトルード」、其教育的價値は何人も知る所、今更贅するの要なし、譯者の筆亦流暢典雅にして、通讀殆んど時の過ぐるを覺えず熟讀玩味すれば、まことに教育者には百千卷の教育書を讀むよりも得る所多きを疑はず。吾人は現今混沌として汚濁せる小說界に此の如き優尙高雅の書の出でたるを歡迎し、獨り教育者といはず獨り社會改良家といはず、不規律亂雜極まりなき方今我邦の一般家庭の資料として推薦せんと欲するを以て、たとひ譯者の言あるにせよ今少し柔かに今少し通俗的に譯述せられたらんにはなど思へど是れはた望蜀の感とでも云ふべきにや。（定價六十五錢發行所育成會）

●ジャンダーク　全一冊

勁林園主人編

西洋傑婦傳の第一篇として　かれて女子の友紙上に續載せしものを纏めて優美なる一小册子となせるもの、たゞに稀世の烈婦の面影を見るを得るのみならず、又以て當時の世界史の一斑を知るに足る。夏は今や來らんとす　綠陰の下清流の邊　希くば文藝倶樂部一流の小說を拋ちて　此種の册子を繙かれんことを敢て勸むる

なり（定價二十錢　東洋社出版）

●普通育兒法　全一冊　木村鉞太郎著

由來我邦此の如き書籍に乏し、本書は小兒科專門醫としての著者が多年の經驗を積みて著述せられたるもの、特に弘田博士の校閲をも經たれば精確なるは論ずるまでもなかるべく、全編總振假名附にして所々圖解を加へ、育兒に關する一切の注意を網羅し盡せるが上に食物の調理までも說明せられたれば、凡そ世の母たらん人々には、是非とも一讀せられたき良書なり。（定價七十五錢　賣拂所　金昌堂。）

●兒童候文例　全一冊　國語研究會編

幼き子ども等が候文を書きならふ便りにとて綴られたる者、面白き文題五十有餘を擇びて、載せられたるが、文體の平易なること問題の面白きこと等は本書が從來の著述に比して、優に一頭地を拔けるもの敎師の參考用、生徒の賞品用には必適の書なり。（賣捌所　金昌堂）

●新撰受驗寶典

小學校敎員檢定試驗師範中學入學試驗者の便を計りて編纂せられたるもの、第一卷日本歷史問答、第二卷修身倫理敎育勅語問答、第三卷日本地理問答已に發刊せられ尙必要なる學科目は續々出版せられんとす。各卷悉く問答體を以て必要なる項目を說明して泄らすなく殊に携帶に便なる袖珍の小册子なれば斯道に志す人々には最有益なる良書として推薦す。（定價各卷十三錢帝國通信講習會發刊）

女子の友　第九十號、九十一號　東洋社
姫百合　第三卷第五　姫百合社
日本婦人　第十八號　帝國婦人協會
なんな　第四號　大日本女學會
女鑑　第二百二十八、九號　國光社
家庭　第四、五號　大日本佛敎婦人會
日本之小學敎師　第三卷第二十九號　國民敎育社
敎育時論　第五百七十八、九、八十號　開發社
東京市敎育時報　第八號　東京市敎育會
敎育學術界　第三卷第一號　同文館
敎育實驗界　第七卷八、九號　育成會
慶應義塾學報　第三十八號　慶應義塾
哲學雜誌　第十六卷、百七十一號　哲學書院
彰善會誌　第三十八號　彰善會
東洋哲學　第八編第五號　東洋哲學會
評釋界　第一期第四號　四海堂
小天地　第一卷第七號　金尾文淵堂
交通世界　第三號　交通世界社
よろづ報知　扶桑廣告株式會社
婦女新聞　第五十一、二、三、四號　婦女新聞社
淨土敎報　第四百卅二、三、四、五號　淨土敎報社

讀者會員諸君諸媛に謹告す

初號發刊以來非常の曷采を以て歡迎せられたる本誌は早くも茲に半歲の月日を閱しぬ。日誠に淺しと雖も、幸に讀者會員諸君の厚意と不肖編輯員等の微力とに由り、今や優に女子教育家庭教育幼兒保育界の一大勢力となるを得るに至れり。本誌は今後益諸君の厚意に酬ひ本誌の主張を貫かんが爲めに漸次改良の歩を進めんと欲し次號よりは聊か體裁を改むる所あらんとす。尙讀者會員諸君、本誌に向つて希望せらるゝ所あらば本誌は及ぶべきだけ諸君の希望に沿はんと欲するを以て遠慮なく申し出でられんことを望む。

尙左に次號の要目を紹介す。

次號要目

家庭欄には、神門とも子女史の家庭の愉快、ふみ子氏の過ぎたる躾方は共に近來有數の好文字、其他長瀨醫學士の看護法の續稿の他更に坂井國手の海水浴の衞生は時節柄是非一讀すべき者たらん。學術欄には擊水生の英語俚諺解及東海生の蛙の話出づべく、史傳欄の鄭越生のローランド夫人は巧に慘たる巴利の恐怖時代を目前に髣髴せしめ下村教授の

望東尼はこゝに本號に完結すべし。其他子ども文苑說林寄書雜錄彙報等例によりて益趣味あり。尚本號には**米國婦人バラルド孃**が我國**女子教育家庭教育等に付きての精細なる觀察**談を掲載せり。

尚、編輯上の都合に由り來る七、八兩月間に限り、本誌に關する照回、寄稿等は凡べて東京神田區一ツ橋通り町十三番地東基吉宛にて御送附ありたし

會報

明治三十四年五月八日午後二時女子高等師範學校附屬幼稚園に於て幹事會を開き左の事項を決議す。

一會務を分ちて會計係及庶務係の二とし其分擔を定む則ち

（イ）會計係（野口、森島、林、松村、佐々）

（ロ）庶務係（清水、雨森、稻石、羽田、神門）

入會

東京ノ部

女子高等師範學校保姆練習科

同　澤村きみえ
同　富岡むめ
同　關　壽賀
同　海野きみの
同　吉田まさ
同　中川よね
同　矢野ふさよ
同　林　富美
同　中澤よし
同　野村さん
同　田邊　春
同　大島小春
同　笠井志賀
同　秋山七朗

本郷區森川町一番地丸茂內
赤坂區青山北町四丁目百一

地方ノ部

相州横須賀港横須賀小學校

同　松岡さち
同　重田ふち
同　平塚貞
同　坂本秋

靜岡縣師範學校女子部　大村米
兵庫縣御影幼稚園　山根とし
大分縣高等女學校　宮地榮
大阪市東區今橋三丁目愛珠幼稚園　鹽野吉兵衛

會費領收（明治三十四年五月）

一金壹圓貳拾錢　至明治三十四年四月至仝三十五年三月　安井てつ
一金三拾錢　自明治三十四年四月至仝三十四年四月六月　岡田ちよ
一金五拾錢　自明治三十四年四月八月至仝　小谷野千代
一金五拾錢　自明治三十四年四月八月至仝　野尻てつ
一金六拾錢　自明治三十四年三月八月至仝　清家みすえ
一金五拾錢　自明治三十四年一月五月至仝　岡田起作
一金壹圓貳拾錢　自明治三十四年三月七月至仝　雨森釧
一金四拾錢　自明治三十四年七月至仝　山田光子
一金壹圓　自明治三十四年五月至仝三十五年二月　大村よれ
一金三拾錢　自明治三十四年四月六月至仝　中島行德
一金三拾錢　自明治三十四年四月六月至仝　羽田はる
一金六拾五錢外二五錢　自明治三十四年一月六月至仝　高羽ふみ
一金六拾五錢外ロ五錢　自明治三十四年六月至仝　中島よし
一金壹圓貳拾錢　自明治三十四年一月至仝十二月　田坂りつ
一金壹圓　自明治三十四年三月至仝十二月　山岡てる
一金壹圓　自明治三十四年五月至仝十二月　山根さし
一金六拾錢　自明治三十四年四月九月至仝三十五年二月　藤村いと
一金五拾錢　自明治三十四年八月至仝　松村ひさ
一金五拾錢　自明治三十四年四月八月至仝　稻石やす
一金五拾錢　自明治三十四年五月八月至仝　林ふみ
一金貳拾錢　自明治三十四年五月六月至仝　瀨野梅代
一金貳拾錢　自明治三十四年六月至仝　武藤かめ
一金貳拾錢　自明治三十四年五月至仝　安野みち
一金壹圓貳拾錢　自明治三十四年三月至仝　高橋しけ
一金壹圓貳拾錢　自明治三十四年四月至仝　野村すぎ
一金壹圓貳拾錢　自明治三十四年三月至仝三十五年四月　志村たか
一金六拾錢　自明治三十四年四月至仝三十四年九月　沼村あい
一金壹圓　自明治三十四年四月至仝三十五年一月　津原ちか

會務整理上差支候間會費未納の諸君は至急御納附相なり度候

此廣告に依り御注文の御方は婦人と子供を見たる旨御附記ヤ乞ふ

小野滿智子著
後藤芳景先生畫

容顔艶麗 美人法

（密畫入頗美本）

全一冊正價貳拾錢郵稅貳錢郵券代用
壹割增

人生れながらにして世二相揃ひたる眞美人は稀也その化粧の巧妙と服裝の好配とによりて美人となる著者は多年の實驗にて化粧及服裝の仕方にて色の黑きも白くなり鼻の低きも高く見え額の廣きは狹くなり口の大なるも小さく見せ背の低きは高くなり目尻の下りたるを上りて見する等其他數多の秘法は圖畫を以て之を示し加るに『男女平素の心得』を附せり本書を一度繙く時は醜は美に美は益々美を加ふ實に稀世の至寶也

發行所 東京橋區中橋和泉町四 藍外堂

國語研究會編

新體 兒童い文例

製本優美
定價金拾錢
郵稅金貳錢

小學校に於ける諸學科の內、兒童の最困難するは國語科中の綴方なり。とは世人の齊しく唱ふる所なり、綴方教授實に困難なるに相違なきも教授法の研究未だ足らず方法宜しきを得ざる實もなしと謂ふべからず、本書は先きに小學國語綴方教授書を出して兒童の發達階段に留意し其の思想に適合せる教材を選び方法を採るべき模範を示し、大に世に歡迎せられたる國語研究會の編したるもの、文題悉く兒童的にして更に又兒童的思想と兒童的表出と綴り得て遺憾なきは是れ實に本書の特色なり、決して世にありふれたる「寸楮拜啓、御座候」的のものにあらず、されば尋常科三四學年、同補習科、高等科一二學年生徒の模範文とするに最適せり、且つ紙質製本共に頗る優美なれば賞與品に適せり。

發行書肆 東京市日本橋區本石町一丁目廿一番地 金昌堂

（後付の一）

此廣告に依り御注文の御方は婦人と子供を見たる旨御附記を乞ふ

◎國民教育學會編輯（全國小學教員一大共同機關雜誌）

日本之小學教師

●六月十二日發行
第三卷第三十號
●會費一ヶ年壹圓貳拾錢
●一冊金拾錢郵稅金壹錢

（肖像）には東京女子師範學校長林吾一、愛知縣師範學校長入田義弼、新潟縣女子師範學校長廣瀨吉爾、三重縣師範學校長山高幾之丞の四君（社說）には師範學校教育生の（教授及管理）には教授法講義○遊戲の方針町田則文○修身科教授立柄教俊○普通文の讀方教誤選、群馬縣師範學校根岸伴作○遲鈍なる生徒の取扱法岡安末吉○高等師範附屬小校及埼玉縣師範附屬小（教材）教材としての童（學術講義）には○社界學十回講義遠藤文學士○學校參觀記○操行査定法話○地理科教材日獨初等教育制度の比較十回講義中谷延治○夢（問答）○物理化學、博物問答○福澤諭吉翁（教育家傳記）○井上半介（小學教師界）免許狀講話小川正行受領者○東京府小（叢談）○小西盲啞學校長、伊藤埼玉師範校學長の人物其他學校長の教育談及總南教育雜話（批評）○茗溪會員某氏の澤柳局長の演說の反駁○多田氏に答ふ、川島氏（內外彙報）○東京府教育會の大失策○東京府師範學校新築○等師範學校長の交迭十二回○秋田縣師範學校の善行兒童表彰○文部省は殆んと大學派○文部省內の茗溪會員○師範學校長及視學官と文部屬○麹町區小學校長の退隱料○新任大分縣視學官○千葉縣漫遊錄○獨逸の學校監督○文部省の夏期講習會○海外留學生及外國留學生規程細則○師範學校豫備科と徵兵令○長谷川乙彥氏の辯解書○地方教育彙聞○教育界苦情書紹介

……○御送金の節は一ッ橋通郵便取扱所へ

發行所　東京市神田區表神保町一番地　國民教育社
大賣捌所　同日本橋區本石町三丁目廿六　金昌堂

未來の高等師範學校長候補者投票募集に就て

（後付の二）

此廣告に依り御注文の御方は婦人と子供を見たる旨御附記を乞ふ

毎月一回

女學百姫合雜誌

二十日發行

定價郵税共一冊金拾錢六冊五拾錢十二冊壹圓郵券代用一割増

今の教育は智育德育に重きをおきて美育を省みず今の女子は自信なく自から劣等の性となす今の思想は國家の差別を忘れて世界の平等を夢む今の女學校は國家教育に務めずして宗教を育にとむるもの多し姫百合は此等の缺點を補はんとして現はれたる女學雜誌なり

本誌は毎號名家金玉の文字を滿載すし毎號懸賞の歡迎撰投書を原稿は直接に本社へ御送を乞ふ

明治三十四年　第三卷第四　四月廿日發行

○寫眞版　口繪

○享保文學と有德公　論說　二個　栗島山之助

學藝

○枕の草子詳釋　跡見女學校講師　渡邊文雄

○保元物語の節　文學士　内海引藏

○かゝりむすび法　松下大三郎

文苑

○春の山家　栗島狹衣

○乘合ぶね　毛呂清春

○花ぐもり　のぶを

○あけぼの集　月の桂のや

談叢

○神話にあらはれたる女性　神田中學校講師　高橋龍雄

○獨逸婦人の生活　獨逸婦人　ハイデンライヒ

○成女學校を見る　古藤園

寄書

○新葉集　河野霞月

○女郎花　松井嚴夫

詞藻

○和歌　渡邊文雄撰

○文章　松下大三郎撰

○新體詩　栗島山之助撰

附錄

○裁縫講義　裁縫高等學院長　小出新次郎

發行所　東京市神田區北神保町三番地　姫百合社

（後付の三）

比廣告に依り御注文の御方は婦人と子供を見たる旨御附記を乞ふ

高等師範學校教授　波多野貞之助氏閲
高等師範學校教諭　棚橋源太郎氏著

理科教授法

全一冊
定價金六拾五錢
近刊

本書は理科に關する教授史に顧み歐米諸大家最近の主張と著者が高等師範學校附屬小學校に於ける實驗とに基き編纂せられたるものなり思ふに將來の理科教授は必ず本書により一大改良を見んと而して本書の内容は緒論●第一編◎第一章理科教授上の諸主義形式的綜合主義、實利主義、近世自然科學的主義、歴史的實際主義、折衷說◎第二章理科教授の教育的價値◎第三章理科教授の目的◎第四章理科教材◎第五章理科教材の統合◎第六章理科教授の方法、總論、動植物教授、鑛物教授、理化教授、教授案例、教授案例、教授案例、生理衛生教授、教授案例◎第二編◎第七章村落小學校理科教案◎第八章理科と他教科との關係●第二編◎第七章理科教授上の注意、教師の修養、理科教授上學校に要する設備、大都市の理科教授理科教授と作業◎第三章細土科

新刊廣告

土井龜之進編

新編 普通心理學

全一冊
定價金四拾五錢
郵稅金六錢

發行所　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　金港堂書籍株式會社

發賣所　東京市日本橋區本石町三丁目二十三番地　金昌堂

此廣告に依り御注文の御方は婦人と子供を見たる旨御附記を乞ふ

現今の社會學

高等師範學校講師 文學士 遠藤隆吉氏著

全壹冊近刊

社會學の書公刊せらるゝ者多しと雖も概ね飜譯の類のみ其日本學者の著述に係かり且嶄新の說を以て著述せられし者之を現今の社會學となす斯書は學士の特見に屬する所の集合意識說を以て一貫せる者にして其見識の卓拔なる議論の明晰なる而して行文の流暢なる毫も遺憾とすべき所なし且つ學士の豐富なる學植を以て社會諸般の事實を把へ來り僅に之を數十頁に縮めたる者なるを以て字々味あり句々眞理あり他の引き延ばしを目的とせる書に類せず弊堂學士に乞ふて出版の榮を得たり社會の大勢に着目する人乞ふ一讀して以て其價値の存する所以を知了せられんことを

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

發行所 金昌堂

理科教授用掛圖廣告

矢澤米三郎君校 帝國通信講習會編

理科教授用動物圖

縱二尺六寸 巾二尺

本圖ハ犬猫牛馬鷄禁止鳥鴨鵝蚌蛇鯉鯛ノ類十葉ニテ

定價金壹圓五拾錢 說明書 金拾錢

場遠方ノ生徒ニモ圖畫明瞭ナリ

理科教授用植物圖

縱二尺六寸 巾二尺

本圖ハ梅櫻蕓薹蒲公英麥豌豆松百合胡瓜栗等ノ十葉ニテ

定價金壹圓五拾錢 說明書 金拾錢

近刻●理科教授用生理圖●同上別動物圖第二綴●同上植物圖第二綴 第二綴近刊

右ハ模寫眞ニ迫リ着色鮮麗ニシテ圖畫ハ遠隔ノ生徒ト雖トモ明瞭ナリ實ニ理科教授上必要ノ掛圖ナリ御購求アランコトヲ乞フ

發行所 東京日本橋區本石町三丁目廿三番地 金昌堂

明治三十四年六月五日發行（毎月一回五日發行）
明治三十四年二月六日内務省許可
明治三十四年一月二十八日第三種郵便物認可

增訂三版

國文通釋

關根正直先生校閲　杉山文悟君
杉山俊之助君　共編

全一冊　定價金四拾錢　郵税金四錢

本書は日本歴史を修むる者殊に之が檢定試驗受驗及斯道の獨習者の便に供せんが爲めに編纂したるものにして各項に收めし事柄は左の如し

(一) 人名（又は神名）　古來歴史上に顯はるゝ人名（又は神名）を列擧し正確の讀書を示し其事跡を摘記す
(二) 地名　古戰場及城柵を擧げ其所在地を示し且歴史上如何なる事のありしかを記す其他歴史上に關係ある地名
(三) 政治法律　官職、位階、俸祿、貨幣其他諸制度法令等を擧ぐ
(四) 風俗　家屋、飲食衣服及冠婚葬祭に關する事項其他種々の遊戯
(五) 學問　古來著名の書籍の解題、藩學、私學及現時の諸學校の起原沿革
(六) 美術工藝　繪畫、彫刻に關する事項、織物、染物樂器其他廣く美術工藝に關する事項
(七) 宗教　神社、佛閣、宗教の諸宗派、宗教上の祭禮等
(八) 雜　前七項の何れとも定め難きもの及其何れにも屬せざるものを擧ぐ

以て本書が如何に必要有益の書なるかを知るべし乞ふ一本を備へて其の眞價を試みられよ

發兌　金昌堂　東京市日本橋區本石町三丁目
杉山辰之助
（電話本局九百五十八番）

國文通釋

國學院講師逸見仲三郎先生校閲
國語研究組合編纂

全壹冊　近刊

此の書物は只今各府縣の中學校にて教科書として採用して居る各種の讀本中より六ヶ敷字句詩歌等拔き出して之に簡單なる解釋を施したるものであれば中學校の生徒諸君は申すまでもなく師範學校や高等女學校や小學校教員養成所などの生徒諸君から教員檢定出願志望者諸君に至るまで苟も國文を繙かんと思ふ御仁達の一日も書架の片隅に闕きてならない必要の書物であれば一冊を求めて其の虚妄でない事を知り賜へ

發行所　金昌堂　東京日本橋區本石町三丁目廿三番地